

一、本課は本當に奇抜な材料で、子供等の非常に面白がる教材である。蓋し作者の要求は子供等のかうした心理に投合して、雪の上に印した色々の動物の足跡を紹介して、自然を觀、自然を讀む所の興味をそゝり、傍ら自然と親しみ自然に對する研究心を啓培せんとするにあらう。

二、本課を面白く理解させるには、可成彼等の實經驗と交渉して授けなければならぬ。即ち自分嘗て雪の降つた朝、門の前に出たところが、人のまだ誰も踏まないのに、そこに梅の花のやうな愛犬の足跡があつたとか。前の橋の上に立つて川邊を見た所が、雪の上に楓の葉の形をした鳥の足跡がずつと續いてついでついでとか。兄さんと畠へ大根をこぎにいつたとき、そこに兎の足跡が縦・横についてゐたとか。兎に角讀本にある足跡及びその足跡のある境地と交渉のある經驗が是非必要である。實はかうした經驗がないと、如實に興味をそゝることが出來にくいのである。故に可成是等の經驗を得させ、然る後に讀本に入るやうにする。併し雪の全く降らない地方にあつては止むないことである。故にかうした地方にありては、繪畫其の方法によつて、其の足跡、その境地を想像するやうに工夫しなければならない。

三、文字、語句等については、次に示す所に基き、平易に説き明確に知らしめる。

(一) 漢字

「跡」——形聲文字で、迹と同字である。人の歩みし足あとの義である。故に足又は足扁をかく

のである。轉じて廣く無形の事業、行爲、故例等の義となす。亦はまた音符である。漢音は「セキ」吳音は「シヤク」で、訓は「アト」である。

「散」——會意形聲文字で、きれぐれの肉の義である。後専らチルの義に用ひて、本義を忘れるに至つた。音は「サン」で、訓は「チル」である。

「線」——形聲文字で、絲綉イトスガの義である、故に糸扁をかく。泉は音符である。音は「セン」で、訓は「スヂ」「イト」等である。

「似」——形聲文字である。人の貌を彼と此と互に相にさせることである。以は音符である。音は「シ」、吳音は「ジ」で、訓は「ニル」である。

「廻」——會意形聲文字で、回と同じくメグル義である。メグリ行く所から回ユクに丸を加へたのである。回ウライは又音符である。

「描」——形聲文字で、摩り擦する義である。前は音符である。音は「セン」で和訓は「ソロフ」である。

(二) 語句

「のきは」——家の軒に近い所。

「もみぢの葉を散らしたやうなのがたくさんある」——こゝに言ふ「散らした」とはあたりに撒き

散らした意味でなく、線の上に(勿論うねつてゐるが)一葉宛置きならべたやうになつてゐるのをいふ。

「ねぎ鳥」——葱を作つてある鳥。

「梅はち」——紋の名。單瓣の梅花を正面から見たりるがいたものである。これは既成のもの、又は塗板上に畫いたものによつて觀念を明かにする。

「多分」——「おほかた」又は「たいてい」に同じ。

「馬子」——こゝでは馬を曳いて行く人をいふ。

「足だ」——足高の義。道悪き時に用ひる下駄。齒は櫛、樺などで造る。

「きじ」——標本又は掛圖を示して其の觀念を明かにする。

「たどつて行くと」——こゝでは雉子の足跡について行くと之意。

「うさぎ」——體長約二尺ばかりで、全身は褐色又は白色である。耳は頗る長く、自由に動すことが出来、音響を聞くことが甚だ敏速である。眼は圓大で、やゝ凸起してゐるから、一時に前後左右を見得るの便利がある。後肢は前肢に比すれば長大で且つ力強く、よく跳走に適して居る。併し坂路を降ることが頗る拙劣である。野兎は常に山地の林叢中に棲息し、冬は雪を被れる藪の内に潜んでゐる。性頗る怯懦で晝間は潜伏し、早朝、夕方、夜間にのみ徘徊して、木の

葉、野菜、豆類、若枝の皮、嫩葉等を食する。兎の肉は其の味淡泊で蛋白質に富んでゐる。草は手袋、襟巻、帽子等に用ひ、毛は筆の穂としました羊毛に混じて毛織物とする。

「新しいのが」——「の」は足跡をさす。

(三) 語法等

これはにはとりの足跡……

あれはからすのであらう。

れすみぎ尾を引きながら走つたのであらう。

れすみぎ尾を引きながら走つたのである。

きじにちがひない。

きじにちがひなからう。

かういふ足跡になる。

かういふ足跡になるのである。

もみぢの葉を散らしたやう(比喩)

梅ぼちのものをおしたやうである(同上)

二の字をいくつもおしたやうに(同上)……等。

四、文章は先づ「雪の降つた朝外へ出て見ると、雪の上にならぬ足跡がついてゐる」と總叙し、次に部分に入つて、我が家の軒端に近くある鶏の足跡から、向ふの鳥に、往來に、山の下近く

に印する鳥・犬・鼠・馬・雉子・兎等の足跡につき面白く叙述し、最後に「今夜又雪が降ると、このいろ／＼な足跡が消えてしまつて、明日の朝は又さまざま／＼な新しいのが出来るであらう」といつて收述してある。

作者は一少年と見てよからう。位置は言ふ迄もなく動いて居る。境地は勿論山里で、我が家の門を出ると、其處に畠がある。畠の傍らは往來で、これが山の麓に通じて居る、従つてこの道を歩いて行けば麓に達することが出来るといふ譯になつて居る。次に、今朝の雪は初雪といつたやうに珍しい雪に違ひない。而して餘計降らないで、二三寸位だらう。それは「二の字をいくつもおしたやうに見えるのは足だをはいて通つた云々」といふ記述によつて推察し得る。兎に角初雪の降つた朝、子供が喜んで外に出たとき、先づ鶏の足跡を發見し、これに感興が動いてだん／＼山の麓近く迄行つて見ると、そこ／＼に色々な足跡を経験したことになつて居る。形式上に於て、

「……その足跡をたどつて行くと、雪が少しかき散らしたやうになつてゐて、足跡が見えない。飛立つ時に羽で打つた跡であらう」

「三本足の獸がかけ廻つたやうに見える」

「今夜又雪が降ると、このいろ／＼な足跡が消えてしまつて、明日の朝は又さまざま／＼な新しいの

が出来るとであらう」

といふ所は中々に面白い。また色々の足跡を適當な比喻を使つて釋明してある所も中々によい。比喻につき修練させるとして最も適當である。それから全文殆んど「であらう」を使つて推量的に叙述してある點も注意すべきである。

五、できるなら、本課の内容を色繪にした掛圖または塗板畫の用意がありがたい。

(乙) 教授の實際

第一時

▽第一・二節の教授

- 一、第一節につき各自をして自由に一讀させる。
- 二、彼等の質疑に應じ、また教師より主要の語句、語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に二三回讀ましめる。
- 四、内容を吟味する。(掛圖及び兒童の經驗と交渉して)
 - 1、雪の降つた朝の光景。
 - 2、軒端に近い所から始つて、門の外まで鶏の足跡がついてゐる境地。
 - 3、慈鳥に鳥の足跡が、其他門の内外に犬や鼠の足跡がついてゐる境地……等。
- 五、内容を意識しながら自由に一二回讀ましめる。

〔注意〕第二節も前の取扱に準ずる。

六、第一・二節を連続して誦讀の練習を行ふ。

第二時

▽第三・四・五節を授く

(第一時に準ずる)

第三時

▽全文の復習及び應用

一、復習

形式上——指名讀。 質疑應答。 主要の語句等につき問答。 全文を自由に一・二回讀。

内容上——内容の要點につき問答する。

二、練習應用

(一)漢字書取。

个雪が降る	雪の朝	足跡	門の外	葉
个散る	島の中	梅ばち	二行	一方
个ちの線	多分	尾を引く	よく似た足跡	
个飛立つ	歌	かけ廻る	卵形	

个足を捕へる 短い足 雪が消える

(二)次の點線をうづめて纏つた文にさせる。

- (1)雪の降つた朝、外へ出て見ると……………。
- (2)……………から始つて……………まで……………。
- (3)犬の足跡は……………。
- (4)道には……………が入りまじつてゐる。
- (5)……………へ行つて見ると……………。

(三)假名遣

もみぢ	ちらしたやうな	にはとり……………	であらう	一すぢ	れすみ	わらぢ	入りまじつて	きじ
かういふ足跡								

〔注意〕雪の地方に於ては、本文の如き經驗は兒童に試み易いから、各自に試みさせ、それを本文に倣うて綴らしめ、適當に添削して、補習文として讀ましめることも賢い考である。

第二十二 チリモ積レバ山

要旨

形式上では新文字の讀み方、書き方。難語句の意義。語法等につき知らしめて、本文の讀解に習熟させる、内容上では、小積んで大をなすの道理を授け、常に之を處世の上に應用すべきを知ら

しめる。

教材

第二十二 チリモ積レバ山

「チリモ積レバ山。」トイフコトアリ。ソコノ見エザル深キキドモ、一スグヒ一スグヒノ土ヲホリ上ゲテウガチ、見上グルバカリノ高キ家モ、一枚々々ノレンガワテ積ツネテキヅク。
 樺糸一スグヅツ加ヘテ一反ノ布ヲ織上ゲ、ソノ布チ一ハリヅツメヒテ一枚ノ着物ヲ仕立ツ。
 廣キ海ニ浮カベル小舟ヲ見ヨ。動クコトオソケレドモ、イツカ島カゲニカクレ、又島ヲハナレテアラハル。カクシテツヒニ目ザスミナトニモ着クナリ。

人ノ一步ハ二尺ニモ足ラズ。サレド一時間ニハ一里餘リヲ歩ムベク、日數積レバ百里・千里ノ遠キ所ニモ至ルヘシ。

〔新字〕 深 反 浮 着 歩 歩 至

區分

第一時 第一・二・三節を授く。

第二時 第四・五節を授く。

第三時 復習及び應用。

教法

(甲) 教授上の注意

- 一、本課は言ふまでもなく教訓的材料である。即ち「塵も積れば山といふ諺の通り、小さき力も續けて止まなかつたなら、遂に大なる努力となつて、其處に何事でも成功するといふ道理を會得させて、日常の生活の上に實現させようといふのが其の主眼點である。
- 二、本課には、六つの異つた事實をあげて夫々説いてあるけれども、しかし其の根柢とする生命はいづれも一に歸する。即ち「事の成功は孜孜として倦まざるにあり。」といふにある。従つて各事實を取扱ふにも此の根柢とする生命に觸れさせるやう注意しなければならぬ。
- 三、本課に於ける各事實は連続した生命の一部分でなく、各、獨立した生命である。故に一事實々々毎に完全に取扱つて行く。而して最後の總括に於て、かうした道理はどの事實にも遍在して居る。どの方から見ても動かぬ眞理であるといふ決定を捉へさせる。
- 四、文字、語句等については次に記する所に基き、平易に説き、明確に理解させる。

(一) 漢字

「深」——形聲文字で、もと澁とかく。桂陽の南平から出で、營道に入る川の名である。後發の義を取つてフカキ義とした。窠はまた音符である。音は「シン」で、訓は「フカシ」である。

「反」——會意文字で、厂と又の合字である。本義は手の裏をかへす義である。故に又(手)をかへす。厂は手をかへして上から覆へる貌である。轉じて一般にカヘル・カヘス・ソムク等の義とし

た。漢音は「ヘン」吳音は「ハン」で訓は「カヘル」・「カヘス」・「ソムク」等である。

「浮」——形聲文字で、水上にうかぶ義である。故にシ扁をかく。孚は音符である。漢音は「フウ」吳音は「フ」で、訓は「ウク」・「ウカブ」等である。

「至」——指字文字である。鳥が高い處から飛び下りて、地に來る義である。轉じてツク・トドク等の義とする。音は「シ」で、訓は「イタル」である。

(二) 語句

「チリモ積レバ山」——「微塵積つて山となる」・「砂長じて巖となる」ともいふ。左にこれに類したるもの二三を示さう。

土積成山則樛樗生焉、學積成聖則富貴尊顯至焉。(說苑)

積土成山、風雨興焉、積水成川、蛟龍生焉。(大戴禮)

千里始足下、高山起微塵、吾道亦如比。(白樂天語)

積微塵成山、(大智度論)

積塵成獄、削鐵成針。(普燈錄)

聚小成多、積小致鉅。(陔餘叢考)

「一スケヒ」——こゝでは「かごとか」「もつこ」とかの意味にして知らしめる。

「ウガチ」——井を掘ること。

「見上グルバカリノ高キ家モ」——「仰いで見なければ見ることの出來ないほどの高い家も」の意。

「レンダワ」——煉瓦石の略で、瓦の一種である。普通は長さ七寸幅三寸高さ二寸位の長方體である。赤のと白のとある。家を造る外、いろ／＼他の方面にも使ひ、其の用途甚だ廣い。

「キツク」——城築の義。しかしこゝでは家を造る意である。

「一反ノ布」——「一反」は普通二丈八尺をいふ。併し茲では長い布といふ意味にして知らしめる。

「布」は麻などの纖維で織つたものをいふ。しかし麻織のみに限らず、木綿織などもふくむ。即ち反物と同意にして知らしめる。

「イキ海ニ浮カベル小舟ヲ見ヨ……」——この如き経験のない子供には適當に工夫して想起させる。

「イツカ島カゲニカケレ」——いつの間にか島の裏にかくれての意。茲にいふ「影」は

障子にうつる人影(光を遮つてあらはれる暗體の影)

月影(月の光)

帆影をかくす(帆の姿。人の姿)

といふ風にいろ／＼の意味がある。こゝでは島の姿の方がよいが。しかしそれでも子供にわか

りにくいから、「島の裏」とか又は單に「島」として知らしめるがよい。
「目ザスミナト」——行かうといふ港。港とは海が陸地に入りこんで、船舶の常に碇泊する所をいふ。

「一時間ニハ一里餘リヲ歩ムベク」——「一里餘り」は大人標準であらう。

「至ルベシ」——「至」は到着の意味。

(三) 語法

「チリモ積レバ山」トイフ。

「チリモ積レバ山」トイフコトアリ。

「スクヒノスクヒノ土チホリ上ゲテ……」

「スクヒノ土チホリ上ゲテ……」

「横糸一スヤ加ヘテ、」

「横糸一スヤヅツ加ヘテ、」

「小舟チ見ル。」

「小舟チ見ヨ。」

「カクシテツヒニハ目ザスミナトニモ着クナリ。」

「カクシテツヒニハ目ザスミナトニ着クナリ。」

「一時間ニハ一里ヲ歩ムベク、」

「一時間ニハ一里ヲ歩ムベシ。」

五、本文は先づ劈頭に「塵モ積レバ山」といふ諺を提出し、此の意義を更に

1、井を掘ること及び煉瓦造の家をたてること。

2、織物を織ること及び着物を縫ふこと。

3、蒼海に於ける小舟の進み、

4、人の一歩々々の歩み、

等の實例によつて、具體的に説いたことになつて居る。併しいづれも皆比喩といふ性質を帯びてゐることは言ふ迄もない。尙此の各の裏面に

「かうであるから、各自も倦まず撓まず日々の學習にはげめよ」

といふ結論がかくしてあることに注意しなければならない。此の考察は本文に於て大切な點である。

六、次の語句は比較によつて一層明かに知らしめる。

文 語

イフコトアリ。

見エザル。

深キキドモ、

見上ケルバカリノ、

口 語

イフコトガアル。

見エナイ、

深イキドモ、

見上ケルバカリノ、

一 ハリツツヌヒテ、
 着物ヲ仕立ツ。
 オソケレドモ
 アラハル。
 ミナトニモ着クナリ。
 サレド
 歩ムベク
 至ルベシ。

一 ハリツツヌウチ、
 着物ヲ仕立テル、
 オソイケレドモ
 アラハル。
 ミナトニモ着クノデアル。
 サウデアルケレドモ
 歩ムコトガテキルシ、
 至ルコトガテキル。

(乙) 教授の實際

第一時

▽第一・二・三節を授く

- 一、各自をして自由に一讀させる。
- 二、彼等の質疑に應答する。また教師より主要の語句、語法等につきたづねる。
- 三、讀み方を檢閲し、各自を自由に二三回讀ませる。(此の際劣等生を指導する)
- 四、内容の吟味を行ふ。

實例の意味を明かにし、またその底に流れてゐる教訓を明かにし、しかして日常の生活と結合して、常に實現せんとする意志を喚起する。

五、誦讀の練習を行ふ。

個人的に。また自由に。

六、漢字の書取

深キキド 高キ家 一反ノ布 布ヲ織ル 着物……等。

第二時

▽第四・五節を授く

第一時 に準ずる。但し書取らしむべき漢字は次の如し。

廣キ海 小舟 浮ブ ミナトニモ着ク 一步 一里餘 歩ム千里ノ遠キ所ニモ至ルベシ

第三時

▽復習及び應用

一、復習

各節毎に指名して讀ましめる。質疑に應答する。主要の語句、語法等につき問答する。内容につき問答する。自由に一回讀ませる。

二、練習應用。

(一) 漢字の適用(口唱書取)

深イ川 高イ木 石ヲ積ム 反物 白イ布 廣イ海 水ニ浮ブ 舟ガ動ク 山ニ着ク 道ヲ歩ム……等。

(二) 次の文語を口語に直させる。

- 1、「チリモ積レバ山」トイフコトアリ。
- 2、ソコノ見エザル深キキドモ、……
- 3、一ハリツツヌヒテ一枚ノ着物ヲ仕立ツ。
- 4、動クコトオソケレドモ……
- 5、日數積レバ百里、千里ノ遠キ所ニモ至ルベシ

(三) 次の點線をうづめて纏つた文にさせる。

- 1、人ノ一步ハ……サレド一時間ニハ……日數積レバ……所ニモ至ルベシ。
- 2、廣キ海ニ浮カベル……見ヨ。動クコト……イツカ島カケニ……又島ヲハナレテ……カクシテツヒニハ……着クナリ。

第二十三 一尺の糸くづ

要旨

形式上では新文字の読み方・書き方。難語句の意義。語法等に關する知識を與へて、本文の讀解に

習熟させる。内容では、土井利勝の事蹟を通して、すべて何物でも人に役立たないものはない。故にどんなつまらないものでも、またどんな些少のものでも、大切にして決して粗末にしてならないといふことを諭す。

教材

第二十三 土井利勝

土居利勝といふ大名がありました。或日、居間に一尺程のきぬ糸の落ちてぬたのを拾つて、大野仁兵衛といふ士に預けました次の間に居た士ども、それを見て『あんな糸くづが何の用に立つたらう。大名にも似合はぬ事だ。』と言合つてひそく笑ひました。

二三年たつてから、利勝は仁兵衛をよび出して、『先年その方に預けた糸はいかに致した。』と尋ねました。仁兵衛は『いかに致します。』

と言つて、このきんちやくから取出してさし上げました。利勝はその糸でわざざしのさげをとけた所を結んで、きて言ふには

『これを仁兵衛に預けた時、外の者どもは、あれが何の用に立つたらうと笑つたさうだが、その糸くづも今日はこの通りりつばに役に立つた。無用のやうに見える物でも、いつか役に立つことがある。どんなつまらぬ物でも、どんな少しの物でも、決してそまつにしてはならぬ。仁兵衛が主人の言附をよく守つて、今日まで大切にこの糸くづを持つてぬたのは、感心なことだ』

ある。』

と言つて、仁兵衛にはたくさんほうびをあたへました。

〔新字〕 程 預 致 結 決 感

區分

- 第一時 全文を授く(形式上に重きを置いて)
- 第二時 全文を授く(内容上に重きを置いて)
- 第三時 復習及び應用。

教具

教科書の挿繪を擴大した掛圖。

教法

(甲)教授上の注意

一、本課に於ては、土井利勝の事蹟を通して、すべて何物でも無用のものとは一つもない。利用の如何によつて何かの役に立つものである。故にどんなつまらない物でも、またどんな少しの物でも、決して粗末にしてはならない。といふことを諭すのがその生命である。

二、土井利勝は言も迄もなく、徳川の臣で古河の城主である。従つて生活の状態は所謂武士的生活で、現代とは餘程違つて居る。故に本課に於ては、さうした生活の状態を知らしめることも注意すべき一要件である。

三、本課を取扱ふには、先づ土井利勝の略傳を語り、其の人柄を承知させ、然る後、本教授に入るがよい。之がまた感動される上にも大切である。

四、文字・語句等については、次に示す所に基き、平易に説き、明確に知らしめる。

(一)漢字

「程」——形聲文字である。説文に品也十髮爲程十程爲分、十分爲字すとある。即ち今日十分の一、即ち毛に當る。轉じて程度・量等の義とし、後に長短・多少・遠近・卑尊の程合の義に用ひるに至つた。禾は量る義を示し、呈は音符である。漢音は「テイ」、吳音は「チャウ」で、訓は「ホド」・「ノリ」・「ハカル」等である。

「預」——字源は未詳。音は「ヨ」で、訓は「アラカジメ」・「アヅカル」等である。

「致」——會意形聲文字で、もと至と攴(行く)と文の合字である。送つて詣る義である。後至と攴とを合し、支て至らしめる義とした。音は「チ」で、訓は「イタス」である。

「結」——形聲文字である。絲で締ぶ義、故に絲扁をかく。吉は音符である。漢音は「ケツ」、吳

音は「ケチ」で、訓は「ムスブ」である。

「決」——形聲文字である。地をきつて水を導き流す義。故に水と夬(開く)と合して作る。夬はまた音符である。漢音は「ケツ」、吳音は「ケチ」で、訓は「サク」・「キム」である。

「感」——形聲文字で、心に觸れて響き動く義である。感は音符である。音は「カン」である。

(二) 語句

「土井利勝」——幼から家康の近侍であつたが、天正七年から秀忠に仕へ采邑千石を食んでゐた。慶長五年石田三成等事を構へるに際し、秀忠に従つて山道から西上し、諸軍を指揮した。七年下總小見川に於て一萬石を賜うた。十年叙爵して大炊頭と稱し、秀忠の家老となつた。十五年佐倉に轉じて、三萬二千四百石を領し老中となつた。大阪冬の陣には帷幄にあつて密議に參し、爾來頻りに所領を加へた、寛永二年には上總・下總・常陸等の地十四萬二千石を食み、侍從に任じた。九年秀忠薨じて家光に仕へ、十年古河城に移つて十六萬餘石を領し、十五年大老の職にのぼつた。正保元年七月十三日卒した。年七十二。

「一尺程のきぬ糸」——蠶の絲のことで、此の頃漢絲ともいつて居つた。蓋し支那から渡つて來たからである。

「あんな糸くづは何の用に立つたらう。大名にも似合はぬ事だ」——こゝは本文の生命の前提で

ある。故に此の言に對し十分批判させ、また節儉と吝嗇との區別についても知らしめる。

「ひそく笑ひました」——主人のけちを私かに語りながら笑つたのである。

「二三年たつてから」——年月の長きことを思はさせる。

「その方」——主人が臣下に對する言葉遣。注意させる。

「先年その方に……いかゞ致した」——主人が臣下に對する言葉遣。そこに權威のあることをさしめしめる。

「こゝにございます」——臣下が主人に對する言葉遣。そこに尊敬の念のあらはれてゐることを知らしめる。

「きんちやく」——布又は革などで縫つた袋で、口を緒で引き括り、中に金銭などを入れ携帯するもの。

「きんちやくから取出してさし上げました」——こゝでは仁兵衛が主人の命を守り、二三年の永い間大切に保存して置いた精神をよく知らしめる。

「わきざしのさげを」——「わきざし」差添の刀をいふ。「さげを」は其の刀の鞘に結び付けて下げる緒をいふ。

「外の者」——他の家來を意味する。

「無用のやうに見える物でも、いつか役に立つことがある。どんなつまらぬ物でも、どんな少
しの物でも、決してそまつにしてはならぬ」——本課の生命のある所を十分玩味させ又體現さ
せなければならぬ。

「仁兵衛にはたゞさんほうびをあたへました」——この褒美は祿三百石を増加したのである。

(三) 語法

それを見て…… あんな縁くづが…… さし上げました。

何の役にたつか。

何の役にたつだらう。

先年その方に預けた縁はいかに致した。

先年その方に預けた縁は。

その縁でわきざしのさげをとけた所を結んできて言ふには、

その縁でわきざしのさげをとけた所を結んで言ふには、

外の者は、笑つたさうだ。

外の者どもは、笑つた。

決してそまつにしてはならぬ。

決してそまつにするな。

五、本文に於て形式は勿論だが、内容上に於ても、

1、利勝が一尺程の僅かの絹糸も、家臣に命じて之を大切に始末して置いたこと。

2、後日之を有用に使つたこと。

3、家臣仁兵衛がよく生命を守つて、水い間保存して置いたこと。

4、利勝の訓言と仁兵衛の加藤。

の點は特によく感味させる。また本文は對話文でもあるから、かうした文章の讀解にも十分習熟させる。

六、挿繪に於て

正面に皮の敷物の上に座してゐるのは土井利勝で、其右方にゐるのは大野仁兵衛である。利勝が今拾つた絹糸を仁兵衛に預ける所である。右方の隅の方にゐるものどもは、利勝の家臣で、主人のなす所を以て互にひそくと笑つてゐる所である。教授に於ては是等の點を十分觀察想起させる。

(乙) 教授の實際

第一時

▽全文を授く。

一、目的を告げて、各自をして自由に一讀させる。

二、彼等の質疑に應答。又主要の語句・語法等につき問答する。

- 三、読み方を検閲し、各自をして自由に二三回讀ませせる。
- 四、内容につき問答する。
- 五、誦讀練習。
- 個人的に。また自由に。

第二時

▽全文を授く

- 一、指名して全文を一讀させる。
- 二、主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、自由に一回讀ませる(十分意味をとりながら)
- 四、内容吟味。
- 教授上の注意(五)を参照して、本文に流れた教訓を十分捕捉させる。
- 五、誦讀練習。
- 個人的に。また自由に。
- 六、話方の修練。
- 本課の内容を話さしめて、話方の修練を行ふ。

(對話に仕込んで練習してもよい)

第三時

▽復習及び應用

- 一、復習
- 1、自由に一讀。2、質疑應答。3、内容問答。4、指名して全文を一回讀ませせる。
- 二、練習應用。

(一)漢字の適用。(新字について筆順を授ける)

絲の長さは二尺程ある 父にもらつたお金を母に預けた 母にいたゞいたお金をいかに致した なはを續ふ ど
 んな物でも人の役に立つ 決心 感心な人……等。

(二)語句の適用(短文作爲)

決して よく守つて 用に立つ つまらないもの さて ひそ／＼ いかに致した 似合はぬ……等。

(三)讀本を見て、次の意味のあらはれて居る所を書きあらはして見よ。

- 1、土井利勝がよく物を大切にせられたことの心はどこにどうあらはれてあるか。
- 2、大野仁兵衛が、よく主人の命を守つて、二・三年の永い間、預けられた絲を保存せしこと。

(四)假名遣

おちてゐたのを 絲くづ、 立つだらう、 さげを、 何の用に立つだらう、 ほらび……等

〔注意〕 時間不足の場合には(二)と(三)とを家庭課題とす。

備考

土井利勝

大炊頭土井利勝。舉漢絲零餘尺許。付侍臣大野仁兵衛曰。謹藏之。同僚或有笑其鄙吝者。利勝置不問。居三年。偶利勝腰刀帶尾解矣。急呼仁兵衛曰。持往所付漢絲來。仁兵應曰唯。在此。直取之。腰袋以呈。利勝乃手自拈據。以結其帶尾。欣然微笑曰。無用之用。今而驗矣。遂召其老寺田與左衛門。命之曰。寡人甚嘉大野仁兵謹愼。而重主命也。其增與絲三百石。抑漢絲之爲物。成於彼土桑婦蠶繅苦辛之手。而展轉航于海。只入我都。其勞人力。何如哉。雖則寸殘尺餘。徒委之流塵。是棄天物也。吾心所畏懼。而仁兵之守以不失。謂之事天者。可也。因戲曰。一尺之絲。博三百之祿。所獲亦多矣。夫笑鄙吝者。欲何爲。寧靜子曰。一尺之布尙可縫。君臣相容。有如此者。古人惜一顰一笑。良有以也。(近古史談)

第二十四船

要旨

形式上では新文字の読み方・書き方。難語句の意義。語法等に關する知識を授けて、本文の讀解に習熟させる。内容上では、朝の海、夕の海を背景として、出船・入船等について歌つた叙景詩を感味させ、傍ら自然を好愛する心を養ふを以て要旨とする。

教材

第二十四船

(一)

朝日かやく海の上、
黄金の波をかき分けて、
帆船の船出きそへるは、
ゆくていづこの港なる。

(二)

三日月あはき夕空に、
黒き煙をなびかせて、
汽船の岸に近づくは、
今いづこより歸れるぞ。

(三)

月も落ちたる島かげに、
かゞり火やみをてらしつゝ、
漁船の波にたゞよふは、
何をかつれる夜もすがら。

〔漢字〕 黄金 港 煙 漁

区分

第二十四船

第一時 (一)と(二)とを授く。

第二時 (三)を授け、全文を復習する。

教具

本課の内容を繪にした掛圖。

教法

(甲)教授上の注意

- 一、本課は海を背景として、朝日を負うて出て行く帆船の姿を、夕日を負うて入り来る汽船の姿を篝火を焚いて波間に漂ふ漁船の姿について歌つた美しい叙景詩である。
- 二、本韻文の美を深く感味させるには、小讀者即ち兒童には
 - 1、日の光美しく輝く朝に、黄金の波を分けて出て行く帆前船の姿。
 - 2、月影淡き夕方に黒い煙をたなびかせながら入り来る汽船の姿。
 - 3、沖の島影に、篝火を焚いて釣してゐる漁船の姿。
 等を實際に觀た經驗(又は之に交渉のある經驗)のあることを貴ぶ。故に可能の地に於ては、適當な方法の下に、上記に同様又は類した經驗をめぐりに實驗させ、さうした後、本課の教

授に入るやうにする。不可能の地にあつては、本課の内容を繪にした掛圖を是非準備し、それによつて如實に其の光景を感味するやうに心配する。

三、文字・語句等については、次に示す所に基いて、平易に説き明確に知らしめる。

(一)漢字

「港」——形聲文字である。音は「カウ」で、訓は「ミナト」である。

「煙」——形聲文字で、ケムリのことである。聖は音符である。音は「エン」で、訓は「ケムリ」である。

「漁」——會意形聲文字である。水中の魚を捕へる義である。魚は音符である。漢音は「ギョ」吳音は「ゴ」で、訓は「スナドル」である。

(二)語句

「黄金の波」——コガネの波と讀ませる。金色にびか／＼と輝く美しき波をいふ。

「帆船」——ホブネと讀ませる。

「船出きそへる」——こゝでは、「帆船が互に我まけまいと先きを争つて港を出る」といふ意味にしないで「幾艘の船が白帆をあげて、互に黄金の波をけつて、勇しく港を出て行く」といふ意味にして知らしめる。

「ゆくて」——行く方向のこと。

「なびかせて」——長く横にひいての意味。

「月も落ちたる島かげに」——今まで空にかゝつてゐた月も、だん／＼夜明に近づいて、海の中に隠れてしまつた。薄黒い中に見える島影に」の意味。

「かぶり火」——箒に焚く火。箒は鐵で作つた一種の籠で、長い柄をつけて舟の一端に立て、此の内に火を焚くもの。

四、本文は勿論叙景詩で、三聯から成つて居る。第一聯は朝の出船につき、第二聯は夕の入船につき、第三聯は夜明方に於ける漁船につき歌つたのである。従つて第一聯に於ては

燦たる朝日が山の端に顔出した。港は投げられた日の光に美しく輝いて居る。白帆をあげた船が、黄金の波を破つて、勇しく出て行く。青波は無限に續いて居る。あの帆船の行手はとちらであらう。西か東か、いづこの港をさして行くのだらう云々。

の境地を、第二聯に於ては、

三日月は淡く夕の空にかゝつてゐる。一艘の汽船が一抹の黒い煙をたなびかせながら、だん／＼海岸に近づいて来る。向ふを見渡すと海波渺茫として限りがない。あの汽船はあゝしていづこから來たのであらう云々。

の境地を、第三聯に於ては、

空に美しく輝いてゐた月も、だん／＼夜明が近づいて、海の中に隠れてしまつた。沖の島影には篝火を焚いた船が、波間に出没して見える。あの漁船は夜もすがら、あゝして何を釣つてゐるのだらう方々。

の境地を如實に想起させなければならぬ。

五、本韻文に於て

「ゆくていづこの港なる」

「今いづこより歸れるぞ」

「何をかつれる夜もすがら」

等の語句は何だかかう俗臭があつて、折角の詩趣を損する嫌がある。故に可成俗臭から離れて美化して取扱ふやう注意する。右に反し

「三日月あはき夕空に」

「月も落ちたる島かげに」

の如きは、本當に雅趣に富んだ佳き句である。

(乙) 教授の實際

第一時

▽第一・二聯を授く。

- 一、目的を告げて、各自をして自由に第一節を讀ませせる。
- 二、彼等の質疑に答へ、また教師から主要の語句等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に二三回讀ましめる。
- 四、彼等の經驗と交渉し、また掛圖と交渉して内容の玩味を行ふ。
教授上の注意「四」に記する境地を出来るだけ深く感味させる。
- 五、誦讀の練習を行ふ。

〔注意〕 第二聯も第一聯に準じて授く。

第二時

▽第三聯を授く。

- 一、各自自由に一讀。
- 二、質疑に應答。主要の語句等につき問答。
- 三、讀み方を檢閲し、自由に二三回讀ませせる。
- 四、掛圖及び經驗と交渉して内容の玩味を行ふ。

(教授上の注意「四」参照)

五、誦讀練習。

六、全文を朗讀させる。

個人的に、また自由に。

七、次の問を讀んで答へさせる。

- 1、朝・白帆をあげた船が黄金の波を破つて港を出て行く美しい景色を歌つたところは。
- 2、三日月の影淡き夕方に、一抹の黒煙をたなびかせながら、だん／＼海岸に近づいて来る勇しい汽船の姿について歌つた所は。
- 3、月落ちて鳥影に、篝火を焚いて魚釣る漁船の美しい姿について歌つた所は。

八、全文を綺麗に書取らさせる。

(そらで possible の兒童はそらでかゝさせる)

第二十五 ヤタガラスト金色ノトビ

要旨

形式上では新文字の讀み方、書き方。難語句の意義。語法等につき授けて本文の讀解に習熟させ

る。内容上では神武天皇が中州の賊を討伐し給ふ時に起りし奇蹟につき知らしめて、天皇の御威徳を景仰せしめ、傍ら金鵄勳章の由來を知らしめる。

教材

第二十五 ヤタガラスト金色ノトビ

我が大日本帝國第一代ノ天皇ヲ神武天皇ト申シ奉ル。天皇ハソクナ討平ゲントテ、或時、ケハシヤ山ニ分入りテ、道ニマヨヒタマヘリ、ソノ時ヤタガラストイフ一羽ノカラス、御前ニ立チテ案内シ奉リシカバ、天皇ハカラスノ飛行ク方ヘ兵ヲ進メテ、ソヤスクソノ山ヲ越エタマヘリ。

又或所ノ戦ニ金色ノトビイゾコヨリカ飛來リテ、御弓ノ先ニトマレリ。賊ハソノ光ニ目クラミ、御勢ニオソレテニゲ走レリ。今軍人ノムネニカガヤクケンシクンシヤウハ、コノ古キ吉例ニヨリテ定メタマヘルナリ。

〔新字〕 帝 奉 行 賊 例

區分

第一時 第一節(自七十六頁七行)を授く。

第二時 第二節(自七十七頁七行)を授く。

第三時 全文の復習及び應用。

教具

教科書の挿繪を擴大した掛圖。神武天皇東征の地圖等。

教法

(甲)教授上の注意

一、本課に於ては、神武大帝が中州の兇賊を討伐し給ふ時に起つた二つの奇蹟につき知らしめて建國當初に於ける天皇の御勞苦を察し、御威徳を仰がしめ、傍ら金鵄勳章の由來を知らしめ、國家的精神の涵養に資するを以て教授の主眼點とする。

二、本課を授けるには、先づ彼等の理解に顧みて、當時中州地方は尙未だ王化に霑はないで、兇賊所在に跋扈してゐたこと、及び神武大帝が之を平定して、天業を恢復し給うたことの大意を語り、それから本課の教授に入ることとする。

三、文字・語句等については、次に記する所を参照し、平易に説き、明確に知らしめる。

(一)漢字

「帝」——形聲文字で二(上の古文字)と東の合字である。天下に王たる者の稱號である。漢音は

「テイ」、吳音は「タイ」で、訓は「ミカド」である。

「奉」——形聲文字で、丰と𠂔と手との合字である。兩手を以て物を捧げてゐる貌である。𠂔(兩手)を以つて其の義を示す。此の上に更に手を加へた。丰は音符である。後世更に手扁を加へて捧とかく。奉の字は尊長に仕へ、其の命令を聞く時に手を捧げるから、命令を受ける義にも用ひる。漢音は「ホウ」で、吳音は「ブ」で、訓は「タテマツル」である。

「賊」——會意形聲文字で、もとは則と戈との合字で、國の法を犯し戈を執つて害惡をなす者の義である。則は又音符である。後世誤つて貝と戎の合字とするに至つた。漢音は「ソク」で、吳音は「ゾク」で、訓は「ソコナフ」である。

「例」——會意形聲文字である。本義は人がならぶ義である。故に人と列とをかく。轉じてタメシ・ナラハシ・オキテ等の義となすに至つた。列はまた音符である。音は「レイ」で、訓は「タメシ」・「ナラハシ」等である。

(二) 語句

「ヤタガラス」——備考部参照。

「金色ノトビ」——備考部参照。

「神武天皇」——鵜茅葺不合尊の第四子である。聰明勇武に渡らさせ給ひ、不世出の英主でおは

しました。詳細は備考部参照。

「天皇ハゾクヲ討平ゲントテ」——「ゾク」は當時中州地方にゐた諸兇賊をいふ。

「ケハシキ山ニ分入りテ道ニマヨヒタマフ」——神武天皇が吉備國(今の三備地方)から難波津に至り、河内を経て龍田に赴き給うたが、路險で狭く、行軍容易でない。そこで路を轉じて生駒山を越えて大和に入らうとし給うたに、長髓彦といふもの孔舎衛坂に邀へ戦ひ、皇軍利がなかつた。天皇は弱を示して退き、轉じて紀伊に入り、先づ名草戸畔(戸畔は尊長)を斬り、狭野を経て熊野に至り、海を渡つて荒阪津に至り、丹敷戸畔を誅し、是から更に進んで大和に入らんとし給うたが、山峯重疊、荆棘路を没して進むことが出来ない。いづれに進まんか、路に迷ひ給うた。此の時一羽の八咫鳥が現はれて來て路を案内し奉つたのである。

「御前ニ立チテ」——「御前」は神武天皇の御前である。敬語に注意させる。

「タヤスクリノ山ヲ越エタマヘリ」——八咫鳥の案内によつて兵を進め、遂に菟田に達したのである。こゝで兄猾・弟猾を誅戮し、進んで八十梟と國見山で戦うて之を斬り、また兄磯城と黒坂で戦うて之を斬り、竟に進んで長髓彦を討ち給うたのである。

「或所ノ戰ニ金色ノトビイツコヨリカ飛來リテ」——神武天皇が竟に進んで長髓彦を討ち給うたが、賊軍強うして皇師苦戰尙勝つことが出来ない。時に天忽ち曇つて雹が降り、金色の雲

鵝がいづこからともなく飛び來つて、天皇の弓弭に止つたのである。金色の鵝については備考部参照。

「賊ハソノ光ニ目クラミ、御勢ニオソレテ、ニゲ走レリ」——金鵝の光煜々として流電の如く、長髓彦の軍ために迷眩し、また戦ふことが出來ない。天皇は急に兵を縦つて大に之を撃ち給うた。賊共は其の勢におそれて皆逃げ去つたのである。

「今軍人ノムネニカガクキンシクンシヤウハ」——金鵝勳章については、備考部を参照する。讀本の挿繪にあるは功五級と功七級である。構造は

功五級——金鵝・御光・劍・盾・槍・旗。

功七級——金鵝・劍・盾・槍・旗。

「コノ古キ吉例ニヨリテ」——「コノ古キハ」は神武天皇が兇賊を討ち給うたとき、金鵝が現はれたことのそれをいふ。「吉例」はめでたい例といふことで、金鵝の出現した彼の奇蹟をいふのである。(備考部にある勅語参照)

(三) 語法

神武天皇ト申シ奉ル、道ニマヨヒタマヘリ、御前ニタチテ、案内シ奉リシ、イヅコヨリカ飛び來リテ

(ニゲ走レリ。吉例ニヨリテ定メタマフ。ニゲ走レリ。吉例ニヨリテ定メタマヘルナリ。

四、語法本課には敬語が多くあらはれてゐるから、之を普通語と對照させて、一層其の意義を明かにする。本文は文語體であるから、之を口語に直す力も十分養ふやう注意する。

五、本課は第二節から出來て居る。第一節は神武大帝が中州を討伐し給ひし時に起つた所謂八咫鳥の奇蹟につき叙し、第二節は矢張其の時に起つた金鵝の奇蹟について叙したのである。

本課に於て、かうした二つの奇蹟についてかいた目的は本章の要旨にのべた通りであるが、私共はかうした神祕的な事蹟によつて、我が國は恒にこのやうに祖宗の照鑑があるから、國家の運命は天地と共に悠久であるといふ信仰を抱かさせたいと思つて居る。日本書紀に

既而皇師、欲_レ赴_ニ中州_一、而山中險絶、無_ニ復可_レ行之路_一。乃棲遑不_レ知_ニ其所_一跋涉。時夜夢、天照大神訓_ニ于天皇_一曰、「朕今遣_ニ頭八咫鳥_一宜_ニ以爲_ニ嚮導_一者。果有_ニ頭八咫鳥_一自_レ空翔降。天皇曰、「此鳥之來、自_レ祥夢、大哉赫矣。我皇祖天照大神、欲_ニ以助_ニ成_ニ其業_一乎。」云々。

とある。御祖先のかうした信仰は私共も繼承して之に生きて行きたい。また明治天皇が明治二十三年に御發布になつた金鵝勳章の勅語の中にも、

「天皇ノ威烈ヲ共ニシ、以テ其ノ忠勇ヲ獎勵セントス云々」

とある。即ち金鵝勳章は神武大帝の御威徳を表現された一つの象徴である。之を拜受したといふとは、大帝の垂示の徳を體現したことになる。私共はかうした信念を抱くことによつて、私

其の忠君愛國の思念は根本的に活きて來ることになると思ふ。要するに右に於ける二つの奇蹟は御祖宗の靈の現はれとして神祕的に宗教的に信じさせて行きたい。

六、挿繪に於て、下部に於けるは神武天皇が鳥見とみ(今の大和國生駒郡富雄村の邊り)の地に於て長髓彦と戦ひ給ふ所の圖である。即ち皇軍が鳥見の地に向ふや長髓彦は此處に據つて頑固に抵抗し、皇軍屢、不利に陥る。時に一天急に掻き曇つて氷雨ひまさへ降りだしたとき、何處からともなく金色の鵞一羽飛び來つて、天皇の弓弭にとまつた。其の體からでた光はサーチライトのそれの如く、敵軍之がために目眩くらんで戦ふことが出來ない。皇軍此の機に乗じて今猛烈に攻め立てる所である。

上部にあるは金鵞勳章で、右方は功五級で、左方は功七級である。明治二十三年二月十一日に創設發布せられ、陸海軍の武功拔群なものに賜はることになつたのである。明治二十七八年戦役に始めてそれ等の人たちに下賜された。

(乙)教授の實際

第一時

▽第一節を授く。

一、地圖等を提示し、

1、神武天皇の御東征の概要。

2、金鵞勳章の由來の概要。
につき話す。

二、第一節を自由に一回讀ませる。

三、質疑に答へ、また主要の語句・語法等につき問答する。(文語と口語の關係に注意)

四、讀み方を檢閲し、各自をして自由に讀ませる。(此の際劣等生を指導する)

五、内容の吟味を行ふ。

道の險惡であつたこと。討伐の御困難。道に迷ひ給ひしこと。八咫鳥のあらはれた奇蹟につき。

六、誦讀の練習を行ふ。

第二時

▽第二節を授く。

一、前節練習。

二、第二節を自由に一讀させる。

三、質疑に應答する。主要の語句・語法等につき問答する。(文語と口語の關係に注意)

四、讀み方を檢閲し、各自をして各自に二三回讀ませる。

五、内容を吟味する。(掛圖、勳章の模型等提出)

御征伐の御困難。金鷄の現れたその奇瑞につき。兇賊の討平。金鷄勳章の由來等につき。

六、誦讀の練習を行ふ。

第三時

▽復習及び應用。

一、復習

(1)各節につき指名して讀ませる。

(2)質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。

(3)内容の要點につき問答する。

(イ)神武天皇の御偉業につき。(附説の復演)

(ロ)八咫鳥の奇瑞につき。

(ハ)金鷄の奇瑞及び金鷄勳章の由來につき。

(ニ)國民的信念と國體の擁護。(簡短に附説)

(4)全文をよく意味をとつて自由に一二回讀ませる。

二、練習應用。

(一)漢字の書取。

大日本帝國 申シ奉ル 討平ガ 案内 飛行ヲ 山ヲ越ユ 賊 御勢 軍人 吉例

(二)敬語の摘出。

敬語を摘出し、之を普通語と對照させる。

(三)語句の適用。(口答)

……と申し奉る。 たやすく いづこより かひやく 吉例

三、話方

二つの奇瑞につき話させて話術の練習を行ふ。

備考

神武天皇

神武天皇は彦波武鸕茅葺不合尊の第四子で、御母は玉依姫と申し奉る。人皇第一代の天皇で、皇祖天照大神第六世の孫に當らせ給ふ。瓊々杵尊以來、世々日向におはして四方を統治し給ひしが、天皇の時に及び、皇兄五瀨命と議して、天業を恢弘せんことを圖り給ひ、茲に都を中州に移すの策を決し給ひ、乃ち舟師を率ゐて日向の國高千穗宮を發し、豊後宇佐を経て、筑紫岡田宮にましますこと二年、安藝多祁理に在ますこと七年にして、更に海路より浪速を過ぎ、日下の蓼津に至り、土曾長髓と戦ひて利あらず、五瀨命また流矢に中り給ふ。是において、天皇乃ち道を轉じて、紀伊國菟山に至り給ひしが、五瀨命は傷重くして遂にここに薨じ給ふ。

かくて、天皇は進んで丹敷戸峠を誅し、更に大和の菟田に入りて兄猾を誅し、弟猾を降し、次でまた兄磯城等を誅し給ひ、

威頓に振ふ。饒速日命之を聞き、長髓彦を殺して降服す。尋いで土蜘蛛・居勢等皆誅に服し、中州全く平定す。是に於て、

を大和の國畝傍の東南樞原に奠め給ひ、はじめて天皇の位に即き給ふ。建國の大業、ここに成る。
これ實に紀元元年辛酉正月朔(陽曆二月十一日)にして、大正九年を距ること二千五百九十年の昔なり。御在位七十六年にして崩す。大和國高市郡山本村畝傍山東北陵に葬り奉る。

八咫鳥

八咫は八咫鏡などの八咫に同じく「大」の意をあらはす語なりといふ。八咫鳥の出現に關する古事紀及び日本書紀の文左の如し。
ここに亦、高木大神の命もちて、さとしまをたまはく、「天つ神の御子、こゝより奥つ方になりませし。あらぶる神いと多かり。今天より八咫鳥をおこせん。故、その八咫鳥みちびきてん。その立たん後よりいでませし。」とのりまうしたまひき。故、そのみさとしにまに、その八咫鳥の後よりいでませし。吉野の川の川じりにいたりませし。云々。(古事紀)
既而皇師。欲、趣、中州、而山中險絶、無、復、可、行、之、路、乃、棲、遠、不、知、其、所、跋、涉、時、夜、夢、天、照、大、神、訓、于、天、皇、曰、朕、今、遣、八、咫、鳥、宜、以、爲、嚮、導、者、果、有、頭、八、咫、鳥、自、空、翔、降、天、皇、曰、此、鳥、之、來、自、叶、祥、夢、大、哉、赫、矣、我、皇、祖、天、照、大、神、欲、以、助、成、其、業、乎、是、時、大、伴、氏、遠、祖、日、臣、命、帥、大、來、目、督、將、元、戎、踏、山、啓、行、乃、尋、鳥、所、向、仰、見、而、追、之、遂、達、于、菟、田、下、縣、因、號、其、所、至、之、處、曰、菟、田、穿、邑、于、時、勅、警、日、臣、命、曰、汝、忠、而、且、勇、加、能、有、導、之、功、是、以、改、汝、名、爲、道、臣、(日本書紀)

金色の鷲

金色は、がれいろ、即ち黄金の如く黄にして、かやける色をいふ。トビは猛禽類。體大にして嘴短大、上嘴鉤曲す。翼は長大にして飛力大。尾も亦長大にして、尖端廣がる。頭は青、白色に暗褐色の條斑あり。背部は赤褐、下部は錆色を呈す。人家に近く棲み、小動物を捕食す。體長一尺四五寸。保護島中禁止鳥の一、なほ金鷲の出現につき日本書紀の記するところ左の如し。
戊午年十月二月癸巳朔丙申、皇師遂擊長髓彦、連戰不能取勝。時忽然天陰而雨氷、乃有金色鷲、飛來上于天皇弓弮、其鷲光輝煜、狀如流電。由是長髓彦軍卒皆迷眩、不復力戰、長髓是邑之本號焉、因亦以爲人名。及是軍之得鷲瑞也、時人仍號鷲邑、今云鳥見、是訛也。
因にいふ。今上天皇陛下が明治二十三年を以て御創設あらせられたる金鷲勳章は、この鷲瑞の故事によらせられたるものにして、其の當時下されし勅語は左の如し。

朕惟ミルニ
神武天皇皇業ヲ恢弘シ繼承シテ朕ニ及ヘリ今ヤ皇ニ登極紀元ヲ算スレバ二千五百五十年ニ達セリ朕此期ニ際シ天皇親定ノ故事ニ徴シ金鷲勳章ヲ創設シ將來武功拔群ノ者ニ授與シ永ク
天皇ノ威烈ヲ光ニシテ其ノ忠勇ヲ獎勵セントス衆庶此旨ヲ體セヨ

金鷲勳章は、功一級より功七級までにて、章は金鷲と古代武器との形にて裝飾せらる。功一級より功五級まで(挿畫の右にあるもの)は同形にて、六級と七級(挿畫の左にあるもの)ともまた同形なり。綬は綠色の地に白色の雙線を施したり。又この勳章は功級に應じて終身年金を加賜せらる。即ち功一級千五百圓、功二級千圓、功三級七百圓、功四級五百圓、功五級三百圓、功六級二百圓、功七級百圓なり。而してこの年金は他の勳章、年金又恩給を受くるに妨げなく、且つ受領者死亡したるときは遺族は、なほ一ヶ年間之を受くる事を得るなり。なほ、金鷲勳章賜叙に於ける内規の重なるものは左の如し。
(イ) 將官の初叙は功三級とし、功武を重ぬるに従ひ逐次進級す。
(ロ) 佐官の初叙は功四級、尉官は功五級、准士官・下士・兵卒の初叙は功七級とし、武功を重ぬるに従ひ、逐次進級して、佐官は功二級に、尉官は功三級に准士官・下士は功六級に至るを得。

第二十六 やさしい心

要旨

形式上では、難語句の意義、語法等につき知らしめて本文の讀解に習熟させ、内容上では少女のやさしい心を通して、世の不具者癡疾者に對する同情心を養ふを以て要旨とする。

教材

第二十六 やさしい心

北風が吹いて寒い夕方に、姉のおつると妹のおふみが野道を通つて歸つて來ると、入つばかりの女の子がたもとを顔におしめて、しく／＼と道ばたでないてゐました。おつるは立ちよつて、

「なぜそんなになくのです。おなごでもいたいのですか。何の物でも落したのですか。」と問ひました。女の子はなみだをふいて、

「いえ。さうではございません。私は目が悪いので、つまをつかなければ歩けません。まつき悪い子供が大勢で、私のつゝを取つて、どこかへすてました。目が見えませんが、さがすことも出来ません。」と言ひました。おふみは、

「お、はいさうに、私にさがして上げませう。」

と、あちらこちらをさがし廻つて、草むらの中で見附けました。

それを拾つてめくらの子に渡しますと、

「あい、ありがたうございます。」

と幾度も禮を言つて、歩いて行きました。おつるとおふみは

「ほんたうにいはいさうな子ですね。」

と言つて、長い間その後すがたを見送つてゐました。

區分

第一時 全文を授く。(形式上に重きを置いて)

第二時 全文を授く。(内容上に重きを置いて)

教具

挿繪を擴大した掛圖

教法

(甲) 教授上の注意

一、本課は舊讀本は「人のなさけ」と題したる韻文であつたが、本書では之を改作して散文とした。韻文は此の期の兒童には六つかしいといふ所からか、それとも他に可然理由があつてのことか。兎に角私共には惜しい感じがする。

二、本課に於ては、可憐な眼病者に對し、一方は之を苦しめ、一方は之を勞つたといふ事實(勿論假設ではあるが)と交渉して、世の中の不具者・癡疾者に對し、其の境地に深く同情し、出來るだけ親切に勞つてやらうとする心を喚び起すを以て教授の中心生命とする。

三、文字・語句等については、次に示す所に基き、平易に説き確實に知らしめる。

「北風が吹いて寒い夕方に」——こゝでは冬の風、而かも身を切るやうな冷たい風の吹く夕方であると知らせる。

「姉のおつると妹のおふみが野道を通つて歸つて來ると」——二人の兄弟が父母の用事で、隣村へ使にいつて、今暮方に急いで、我が家に歸つて來ることにして知らしめる。「野道」は各自の經驗に訴へて、それぞれに想像させる。

「八つばかりの女の子がたもとを顔におしあてて、しらくと道はたてないでゐました」——八つばかりの女の子であるから、尋常一年生位の子供であることを想像させる。しらくと泣いてゐることについては、それは何の故であらうかを推量させる。またこれは後で眼病者だと知つた時に於ける大切な考察想像であるが、かうした年のいかない、而かも眼が悪くて獨りで歩みかねる少女を、なぜ誰も伴ふものもなく、獨りかうして野道を行くのであらうかも推量させる。

眼がわるくて醫者からの戻りなのか。

家貧なるために、誰か伴ふといふわけにいかないのか。

「なぜそんなに泣くのです。おなかでもいたいのですか。何か物でも落したのですか」——こゝ

に姉のおつるとの同情心が動いてゐる。注意して取扱ふ。少女が泣かなかつたら、勿論彼に眼病者であるといふことが直ぐわかる。併し顔に袂をおしあて、泣いてゐるから、可憐な少女であることがわからない。それで

「おなかでもいたいのですか。」

「何か物でも落したのですか。」

ときいたのである。此の所中々に眞實的である。よく味はさせる。

「さうぞ。やうしてはございませぬ。私は目が悪いので、つゑをつかねれば歩かれません。さつき悪い子供が……どこかへすてました。……」——こゝで少女の泣く譯が分つた譯である。

天下に不自由なことは色々多くあるが、その内でも最も不自由なのは、眼が見えないことであらう。而して此の人が道を歩むに當つて一番頼りになるものは只一本の杖である。然るに今此の杖が悪童にもぎとられてない。少女の悲哀、少女の困難は言ふ迄もない。泣かずに置かうと思つても泣かざるを得ない。眞に同情すべき境地である。故にこゝでは悪童の悪戯を憤ると共に、可憐な少女の境地に、心の底から同情するやうに取扱はなければならぬ。

「お、かはいさうに。私がさがして上げませう」——之は妹おふみの言である。「お、かはいさうに」 おふみの同情心のほとばしつた所である。「私がさがして上げませう」は美しき同情心

の表現である。十分味はさせなければならない。

「あちらこちらをさがし廻つて、草むらの中で見附きました」——おふみが親切に、温い心を以てあちらこちらを探し廻つてゐる境地をよく想起させる。

「あゝ、ありがたうございます」——かういふ少女の言葉の上に無限の喜びの涙のうるはひがあることを深刻に味はさなければならぬ。

「幾度も禮を言つて、歩いて行きました」——深き感謝の念のこぼれてゐる所。前の悪童と比較して、二少女の親切な行動に對し、不自由な人がいかに心のどん底から感謝してゐるかを十分味はさせる。

「ほんたうにかはいさうな子ですね」——これは二少女の有する高價な美しい同情心の表はれてゐる言葉である。此の至高な言葉に共鳴させて、「自分も亦」といふ意志を喚び起さなければならぬ。

「長い間その後すがたを見送つてゐました」——こゝは少女が不幸な少女に對し、温い保護心の現實した所である。若しや彼の悪童の群れが、再び出て來やしないだらうか、若しや道をふみはづしてころぶやうなことも無からうか。我が家に安全に歸り得るだらうか、といろ／＼と氣にかけ、心を配つて少女の身を見えなくなるまで、見護つてゐる所である。十分感味させる。

四、本文の組立は、不幸な一少女と悪童の一群と親切な二少女とを捉へ來つて、不幸な少女を中心として、悪童の群れはこれを苦しめ、親切な二少女は之を救ふといふことになつて居る。従つて小讀者にも可憐な少女に對しては深く同情し、悪童の罪は深く之を惡み、善少女の行動に對しては深刻に感銘させ、以て道義的生活を樂むやうに取扱つて行く。本課はまた之を對話に仕組んで演ぜさせることも頗る有効だと思つて居る。

五、教材の區分については、全體法を採るを以て適當とする。それは本課の如き生命の連續する文章にあつては、之を切ることは不適當であるからである。また一方分量上から見ても可能であるからである。

(乙) 教授の實際

第一時

▽全文を授く。

- 一、先づ自由に一讀させる、次に
- 二、彼等の質疑に應じ、また主要の語句、語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、後、各自をして自由に二三回讀ませせる。
- 四、次の諸點にふれて、内容につき吟味する。

- 1、一少女は何故北風吹く寒き夕方に野道に立つて泣いてゐたか。
 - 2、それを見て二少女はどうしたか。
 - イ、姉のおつるは。
 - ロ、妹のおふみは。
 - 3、二少女の親切に對して眼の見えない少女はどういつたか………等。
- 五、誦讀の練習を行ふ。
- 個人的に、また自由に。

第二時

▽全文を授く。

- 一、一兒童を指名して讀ましめる。
 - 二、質疑に應答、また主要の語句、語法等につき問答する。
 - 三、内容を一層深く玩味させる。
- (教授上の注意「三」を参照して)
- 四、意味をとつて自由に一二回讀ましめる。
 - 五、次の問を本を讀んで答へさせる。
 - 1、北風が吹く寒い野道の傍らに、可憐な一少女が泣いてゐる哀れなことは、本のどこにどう書いてあるか。

- 2、その泣くのは、お腹が痛くて泣くのでなく、また落し物をして泣くのもなく、悪い子供の一群が、只頼りにする少女の杖を奪つて棄てたのであるといふ、一方は本當に其の罪悪く、一方は本當に可哀相で堪へないことは。
- 3、二人の少女が此の可憐な少女に深く同情し、いろくくと親切に慰め、また世話してやつたことについては。
- 4、眼の見えない少女が心の底から二少女に對し感謝したことについては。

六、朗讀練習。

(一人は作者に、一人は盲者。一人は姉。一人は妹)

七、練習應用。

(一)漢字の書取

北風	姉と妹	野道	顔	悪い子供	大勢	さがし廻る	見附けた	幾度	禮を言ふ	見送る
----	-----	----	---	------	----	-------	------	----	------	-----

(二)語句の適用。(短文作爲)

しくくと 後すがた 見送る いしえ

〔注意〕 若し時間に餘裕あれば話方の修練をなす。

第二十七 ヤクワントテツピン

要旨

形式上では新文字の読み方・書き方、難語句の意義、語法に關する知識等を授けて、本文の讀解に習熟させる。内容上では藥鐘と鐵瓶との議論を通して、主要の金屬たる金銀銅鐵の性質及び其の用途につき知らしめる。

教材

第二十七 ヤクワントテツピン

或晩金物屋ノ店テ、ヤクワントテツピンガタガヒニシマン話ヲシマシタ。ヤクワシガ言ヒマスニハ、

「金類ニハイロク、アリマスガ、中テモ一番役ニ立ツノハ、銅デセウ。金ヤ銀ハ美シイ金デ、ユビロニナツタリ、トケイニナツタリ、又イロク、ナカザリ物ニモナリマスガ、ドチラモネゲンガ高ウゴザイマス。銅ハ金ヤ銀ヨリモタクサンアリマスカラネダンモヤスウゴザイマス。サウシテ錢ニナルコトモ出来レバ針金ニナルコトモ出来マス。私ノヤウナヤクワシニモナレバ、ユワカシヤ金ダラヒナドニモナリマス。銅程役ニ立ツモノハアリマスマイ。」

テツピンハ
「ナルホド銅ハタクサンアツテ、役ニモ立チマセウ、シカシモツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツノハ鐵デセウ。ゴハンチタクカマモ鐵デス。物チニルナベモ鐵デス。ユチワカス私モ、私ノ乗ルゴトクモ、皆鐵デハアリマセンカ。ソノ外釘ヤ針ノヤウナ小サイ物カラキクワシ軍カンノヤウナ大キナ物マデ、鐵ガ無ケレバ造ルコトガ出来マセン。役ニ立ツコトハ銅ヨリモズツト上デス。」

ヤクワシハソレヲ聞イテ、
「ソレデモ鐵ハスガニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」

ト言ヒマシタ。鐵ピンハ又

「私チノサビルノハ人ガ使ハナイカラデス。若シセイ出シテ使ツテクレサハスレバ、イツデモ光ツテキルノデス。銅ハ人ガ使ハレテキテモ、時々青イ物チ出ステハアリマセンカ。ソレガヤハリサビデス。シカモソノサビハ大ソウ毒ナ物デス。」

ト言ツテ、ナカクマケマセンデシタ。

區分

- 第一時 全文を授く。(形式上に重きを置いて)
- 第二時 全文を授く。(内容に重きを置いて)
- 第三時 練習及び應用。

教具

藥鐘・鐵瓶・指輪・貨幣・針金・金盞・釜・鍋・五徳・針・機關車・軍艦等の實物・模型・繪畫等

教法

(甲) 教授上の注意

- 一、本課に於ける要求は金銀銅鐵殊に銅鐵の性質及び用途につき知らしめるにあるけれども、形

式的要求上、議論的叙述の形式及び論法等につき知らしめることも忘れてはならない。

二、本課は、初めから金銀殊に銅鐵の性質や用途を知らしめようとして取扱つては面白くない。初めは二者の議論を眞面目に、而かも批判的に聽いて行き、さうした後で、優劣の審判を下さうとして二者の役立つ點は何々であるか、また性質上の善悪はいづれにあるかと言ふ風に比較考察する時に、其處に自づと性質や用途を會得させるやうに取扱つて行かなければならない。本文に於て此の點が特に注意すべき點である。

三、併し審判といつても、截然と鐵は銅に優れりとか、銅は鐵に劣れりとかいふやうなる結論を捉へさせなくてもよい。作者が「……ト言ツテ、ナカクマケマセンデシタ」として、そこに勝敗の決定を與へて無いのを見ても明かである。かうした判定は各自々々の考察に一任した方が却つて面白い。即ち兒童の各自は自己自身の考察判定に生きて行く譯である。之が所謂創造的營みともいふべきものであらう。

四、文字・語句等につては、次に記する所に従ひ、平易に説いて明確に知らしめる。

(一) 漢字

「銅」——形聲文字である。同は音符である。音は「ドウ」で、訓は「アカガネ」である。

「銀」——形聲文字で、良は音符である。漢音は「ギン」で、吳音は「ゴン」で、訓は「シロガネ」で

ある。

「錢」——形聲文字である。本義は一種の農具即ちスキである。錢は音符である。漢音は「セン」、吳音は「ゼン」で訓は「ゼニ」である。

「針」——説文に鍼の俗字とある。今は鍼は専ら物を刺すハリに用ひ、針を縫針・羅針・指針等のハリに用ひる。音は「シン」で、訓は「ハリ」である。

「鐵」——形聲文字で、鼓は音符である。漢音は「テツ」で、吳音「テチ」で、訓は「クロガネ」である。

「釘」——形聲文字である。丁は音符である。漢音は「テイ」、吳音は「チャウ」で、訓は「クギ」である。

「造」——會意形聲文字で、成就する義である。成就すれば往いて其の成功を告げる所から造と告とを合して作つたといふ。轉じてナス・ツクル・タツ・ハジムル等の義とする。告は又音符である。漢音は「サウ」、吳音は「ザウ」で、訓は「ツクル」・「タツ」・「ハジム」等である。

「毒」——中と毒の合字で、中は艸、毒は淫奔者である。此の二者を合して人を害する草の義とし、轉じて害惡の義となす。漢音は「トク」、吳音は「ドク」で、訓は「ソコナフ」である。

(二) 語句等

「或晚」——「或」は接頭語の一つ。名を知らず、名を定めぬ物事を指すに用ひる詞である。

「金物屋」——「金物」とは食品其の他の諸器具中、金屬で造つたものの總稱である。但し金銀は貴金屬として普通の金物の中に入れない。「金物屋」は金物を商ふ家をいふ。

「ジマン話」——自分を慢じて話す話。

「金類」——「カネルキ」と讀ませる。

「一番役ニ立ツノハ」——「一番」は「第一」に、「最も」といふに同じ。副詞で、下の「役ニ立ツ」を限定してゐる。

「金・銀」——備考参照。

「ユビワ」——金銀を臺として、これに寶石・珠玉を飾り、或は彫刻等を施して指に嵌め、以て裝飾となすもの。

「イロくナカザリ物」——二三の實例をあげて内容を明かにする。

「錢」——銅錢を實際に示して其の觀念を明かにする。併し「錢」といへば一般に一厘錢・二厘錢等もあるが、茲にいふ「錢」は銅でつくつたものをいふ。

「針金」——銅や鐵を伸べて長く絲の如くしたもので、物を束ね、金網を編むに用ひ、その他電信線・電話線等にも用ひ、其の用途甚だ廣い。

「ヤクワン」——形は土瓶・鐵瓶に以て、特に銅又は眞鍮にて造るものをいふ。之は藥を煮るに用ひたものだが、今は湯茶を煮るに用ひる。

「ユワカシ」——銅等で鐵瓶の如く造つたもので、早く湯をわかすに用ひる。

「金ダラヒ」——洗面等に用ひる。

「銅程役ニ立ツモノハアリマスマイ」——「程」は事物の分限を言ひ表はす詞。「クラキ」などいふに同じ。「アリマスマイ」は「アルマイ」を丁寧に言つたので、「マイ」は推量否定助動詞の終止段である。

「ナルホド」——副詞で、一方の言ふ所を肯定したときに用ひる。こゝでは「さうだあなたの言ふ通り」といふ意味にして知らしめる。

「役ニモ立ちマセウ」——推量的に言つた所に注意させる。自己を強く、主張するときには、對者の言を頭から否定しなければならぬが、推量的に溫和にいふことも、所謂眞綿で首をくぐる論法で、却つて利目のあるものである。こゝはかく使つたのである。

「シカシモツトタクサンアツテ」——「モット」は「更に」又は「より多く」の意で、下の「タクサンアツテ」を限定してゐる所の副詞である。對者の主張に對し、「モット」といつてそれ以上に出た所に注意させる。

「カマ」——釜は鐵で造り、形圓く深く、腰に鋤がある。飯を炊くに用ひる。

「ナベ」——釜に似て淺く、魚菜を煮るときに用ひる。鐵等で造つたのを金鐵カネテといふ。陶器で造つたのを土鍋ドナベといふ。

「ゴトク」——鐵で輪を造り、それに脚をつけたもので三脚なるもの四脚なるもの等ある。火の上に立て、鐵瓶などを支へるに用ひる。しかし輪を灰の中に埋めて、脚で支へるものもある。

「キクワン車」——(本書五卷第十九「汽車」の備考部に説明して置いた。就いて參考する。)

「軍カン」——戦闘の用に供するために、特に製造した國家の兵船である。掛圖を示し、其の形體の大體に互つて説き聞す。

「ソレデモ」——「ソレデアルケレドモ」の略で、熟語の接續詞である。上文と一致せぬ場合に用ひる。更に略して「デモ」ともいふ。

「赤クナルデアアリマセンカ」——「アリマセンカ」は反語で、言外に「赤クナリマス」といふ意を含んで居る。

「モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ」——「モシ」はかくもやと事を設けて、おしあて、いふ意の詞である。「セイ出シテ」は「セイヲ出シテ」の略で、力め勵むの意である。こゝでは「いつもつかつてくれ、ば」の意味にとつてよい。

「青イ物」——銅が錆びると生ずる所謂綠青リョクシヤウをいふ。劇毒を有するから、食器として用ひるときには白蠟シロロを塗つて、直接に觸れるを防ぐ。

五、本課は文章上注意すべき點は次の如くである。

(一)二者の主張上、

藥罐は先づ金銀と自己とを比較して自己の役立つことを主張し、之に對し、

鐵瓶は藥罐よりもすつと多くの實例をあげて自己の役立つことを主張して居る。次に

藥罐は方面をかへ鐵瓶の性質上の缺點を捉へて攻撃し、之に應じ鐵瓶は自己の缺點は使ふ人の怠慢に基くことを辯解し、進んで藥罐にも性質上同様の缺點あることを攻撃し、尙一步進んで其の缺點が人に對し劇烈な毒を有することをあげて猛烈に攻撃してゐる。

(二)二者の口調上

初めはいづれも平靜な態度で、溫和な口調で各自の用途を主張してゐるが、次第に怒氣を含み、遂に

「サビテ赤クナルデアアリマセンカ」

「時々青イ物ヲ出ステデアアリマセンカ」

といふ風に鋭い口調で、互に肩を張り目を慎らして、辯難攻撃してゐる。

(三) 論法の形式上

假定——金類ノ中デ一番役ニ立ツノハ銅デセウ。
 藥鐘 主證——金ヤ銀ハ……銅ハ金ヤ銀ヨリモタクサンアリマス。……ユワカシヤ金
 ダラヒナドニモナリマス。
 断定——銅程役ニ立ツモノハアリマスマイ。

假定——モットタクサンアツテモット役ニ立ツノハ鐵デセウ。
 鐵瓶 主證——ゴハンヲタクカマモ鐵デス。……キクワン車・軍カンノヤウナ大キナ物マ
 断定——役ニ立ツコトハ銅ヨリモズツト上デス。

以上の諸點は特に注意して知らさなければならぬ。

六、本課は之を對話に仕組んで、辯論の練習を行ふに最も適した教材であるから、特に一時間を割いてさうあらうことを望む。

(乙) 教授の實際

第一時

▽全文を授く。

一、各自をして自由に一讀させる。

二、次の如く問答する。

- 1、どんなことについて書いたのか。
- 2、それはどこで。
- 3、藥鐘はどういつた。
- 4、鐵瓶は。
- 5、勝負は。

三、尙書物について、十分調べて行かうと告げて、一節々々につき次の順序によつて授けて行く。

(1) 文字語句等につき彼等の質疑に應答する。(2) 教師より主要の語句・語法等につき問答する。

四、讀方を檢閲し、後各自をして自由に一・二回讀ませせる。

五、次の順序の下に誦讀の練習を行ふ。

- 1、先づ藥鐘の言つた所をお讀みなさい。
- 2、それに對し鐵瓶の言つた所をお讀みなさい。
- 3、それに對し藥鐘の言つた所を。
- 4、それに對し鐵瓶の言つた所を。

六、全文を自由に一・二回讀ませせる。

第二時

▽全文を授く。

第二十七 ヤクワントテツピン

一、各節毎に指名して讀ましめ、そこに於ける彼等の質疑に答へる。また主要の語句・語法等につき問答する。

二、全文を十分意味をとつて、自由に一・二回讀まさせる。
(此の際劣等生の指導に努める)

三、内容を吟味する。

藥罐の主張につき——之に對する鐵瓶の主張につき——之に對する藥罐の攻撃につき——之に對する鐵瓶の攻撃につき。

四、誦讀の練習を行ふ。

個人的に(一人は藥罐に一人は鐵瓶になつて)一齊的に(藥罐組と鐵瓶組とに分け)

五、次の事項につき問答する。

- 1、二者の主張の有様につき。
- 2、二者の口調・態度につき。
- 3、二者の論法の形式につき。

第三時

▽練習應用。

一、各節につき讀ましめて、彼等の質疑に答へる。

二、内容の要點に互つて問答する。

三、語句等の練習應用。

(一)漢字の書取

金物屋 或晚 金類 役ニ立ツ 金銀銅鐵 針金 錢 釘 針 造ル 使フ 青イ物 毒ナ物

(二)次の點線の所に金・銀・銅・鐵の役立つことを記入させる。

- (イ)金——……………
- (ロ)銀——……………
- (ハ)銅——……………
- (ニ)鐵——……………
- (三)次の點線をうづめて纏つた文にさせる。
……………類ノ中デモ一番役ニ立ツノハ……………デセリ。……………デス。……………程役ニ立ツモノハアリマスヤイ。

備考

金

金屬中最も貴重せられる一つで、黄色で美しい光輝があるから、黄金ともいふ。永く空氣中に放置して置いても、其の色を變ぜない。又尋常の火熱に達しても熔くことがない。王水(硝酸と鹽酸との混合液)の外酸類に犯さるゝこともない。其の質は柔軟で、伸性・展性に富み、打伸ばせば、日光を透すまでに薄くなる。三萬三千枚を重ねても漸く一分の厚さしかない。又之を引

延せば一匁のもので二里四町に達する細線となすことができる。此の金屬は其の産出少ないから、價も亦非常に貴い。而して其の産出は他の礦物と化合して存するものが殆んどないから、目に見えざる程の細き樹枝狀・絲狀又は粒狀となりて、石英の間に存在してゐる。砂金は、土砂中に混ざる細粒の金で、金を含める石英の塊の碎けて砂となり、河中に流出せし時その中に含まれた金の分れ出て、其の重みによりて河底に留つたのである。

金の産地として有名なるは佐渡の相川、但馬の生野、羽後の院内、薩摩の岸ヶ野・牛尾等である。金の純粋なるものは、その質柔軟であるから、貨幣その他の裝飾品を製するには、銅・銀等を加へ、其の質を硬くして用ひる。その二十四分中、純金の量二十あるものを二十金、十八あるものを十八金と稱する。我が國の金貨は金九銅一の合金である。金は貨幣となす外、時計・指環・時計の鎖・杯・煙管、其の他種々の美術品を製する。金箱は金を打ち伸したるもので、屏風・襖等に貼附する。

銀

白色の光澤ある貴き金屬の一で、展性・伸性に富み、熱及び電氣を導くことは、諸金屬中第一である。硫氣に遭へば硫化して硫化銀と稱する黒色の化合物となる、けれども、空氣中にあつては、少しく曇を生ずるのみで、錆といふほどのものを生ずることがない。銀は自然銀で存在することもあれど、多くは輝銀・方鉛礦となつて産出する。我が國では、羽後の院内、但馬の生野・佐渡の相川等を有名なる産地とする。メキシコ・智利・カリフォルニア等は世界の銀産地として名高く、従つて其の産額も極めて多い、銀は金屬中金について貴重せられ、貨幣・時計・箸・指輪・煙管・鎖・杯・食器・其の他種々の美術品を製する。純銀で用ふることもあれど、多くは少許の銅を混合し、其の質を硬くして用ひる。我が國の銀貨は銀八銅二の割合である。

銅

太古から世に用ひられたる金屬で、展性及び延性に富み、又よく電氣熱を導くに適する。色は本來はアカガネ色と稱する赤色であるけれども、大氣中では錆が生じて小豆色となり、又、濕氣を受けると綠青と稱する綠色の皮が生ずる。この綠青は劇毒あるから食器として用ふる銅器には必ず白蠟を塗つて直接に觸れるのを防ぐ銅は貨幣を

初め藥罐・金盃等日用の器具より諸種の器械・銅版・針金等に至るまで、其の用途極めて廣し。加之、他の金屬と合せて諸種の合金を造るに用ひる。真鍮・青銅・洋銀・白銅・アルミニなどは、皆銅を主成分とした合金である。銅は純粋なる自然銅で産することもあるけれども、多くは黄銅・赤銅・硫銅等の礦石となつて存在する。而して礦石は通常岩石間に脈脈をなして長く續いてゐる。我が國は世界で名高い銅産國で、陸中の小坂、伊豫の別子、下野の足尾等は最も多量に産し、且、品質も良好である。毎年海外に輸出する額は一千萬圓以上に達するといふ。

鐵

質硬くて、容易に溶解しない。重さ水の七八倍ある。伸性・展性に富むが上に、製煉法によつて種々の性質を與へることが出来る。鐵はまた著大な磁性を有し、且つ電氣の導體となる。色は灰白色で光輝あるけれども、大氣中にあつて濕氣を受けると、磁鐵は忽ち錆を生じて、黒色から褐色に變ずる。鐵は純鐵として存するものは少なく、常に酸素・硫黃等と化合して存する。磁鐵は酸化鐵で、一に天然磁石ともいひ、その色黒い。陸中の釜石は有名な産地である。赤鐵も亦酸化鐵で暗赤色を呈する。陸中の仙人山・越後の赤谷等から多く出る。褐鐵は酸化鐵に水分を含み、褐色若しくは黒色である。これ等の礦石と焦炭及び石灰石とを混じ、鼓風爐に入れて空氣を吹込んで灼熱すると、鐵分は溶けて爐底に集る。之が即ち鑄鐵である。鑄鐵は百分中三乃至五分の炭素を含めるもので、少量の燐・硫黃・硅素を雜へ、其の質脆くて碎け易い。しかし、最も鑄け易い故に、鍋・釜・鐵瓶等の鑄物を造るに適する。鑄鐵を強く熱し、空氣を送つて炭素を除くと、強靱で延性・展性を有するものとなる。之を鍛鐵といふ。最も炭素少なく、且熔け難い。鐵板・鐵線・車輛・機關等を作るに適する。又鑄鐵の炭素の量を減じ、或は鍛鐵に炭素を加へて得る鐵を鋼鐵といふ。鋼鐵は從來木炭末に鍛鐵を包み赤熱して製したが、現今はベッセメル法によつて、鑄鐵を酸化して炭素の含量を減じ、多量にこれを製する。鋼鐵はその溶解の度鑄鐵と鍛鐵との中間にある。之を赤熱して急に冷すときは、硬くて脆く、徐々に冷すときは、軟くて脆くない。之を適宜に鍛練せば、或は硬くて強からしむべく、或は彈力に富ましめることが出来る。製鐵中用途甚だ廣く、諸種の刃物を始め、軍艦・鐵軌・時計其の他の彈機・針等の製造に用ひる。鐵は金銀の如く美麗でなく、且、其の産出額多きがために、貴金屬としては、重んぜられないけれども、今の世は鐵器時代と呼ばるる程あつて、

鐵の應用最も多く、小は釘・小刀・鍋・釜等の類を始めとして、大は家屋・橋梁の建設から諸種の機械・汽機・軍艦等の製造に至るまで荷も文明の利器と稱するものは、一として其の材を鐵に仰がないものはない。すなはち、その人生に對する關係から見れば金屬中最も重要なものといはなければならぬ。だから鐵の産出の多寡を以て一國の盛衰・貧富・強弱を卜することが出来る。

第二十八 双物

要旨

形式上では新文字の読み方・書き方、難語句の意味、語法等に關する知識を與へて本文の讀解に習熟させる。内容上では鋼鐵の性質及び之によつた及物の種類・用途につき知らしめるを以て要旨とする。

教材

第二十八 双物

或小學校の三年級で、先生がみんなに問ひました。

「小刀や、はさみや、かみそりやはうちやうのやうな物を何といひますか。」

しばらくの間は誰も手を舉げるものがありませんでした。その中、一人の男生が

「双物です。」

と答へました。

先生「さうです物を切る道具で、双があるから双物といふのです。双物にはいろいろな種類があります。大工の使ふ道具には、どんな双物がありますか。」

又一人の男生が

「のみや、かんや、ちやうなどがありません。」

先生「それから農具には。」

その子が

「すきや、くはや、鎌やおし切があります。」

先生「すきとくはは大切な農具ですが、双物とはいひません、鎌やおし切は双物です。それから昔から軍に使つた双物もいる

いろいろあります。」

一人の女生が

「刀やなぎなたなどがあります。」

先生「よろしい。双物は何で造りますか。」

女生「鐵で造ります。」

先生「さうです。鐵の中でも鋼鐵といつて一番たい鐵で造るのです。昔さんはちやが双物を造つて居るのを見たことがありませんか。」

この時には、男生も女生も残らず手を舉げました。

〔新字〕 双 小 級 學 工 農 鎌 鋼

區分

- 第一時 全文を授く。(形式上の學習を主として)
- 第二時 全文を授く。(内容上の學習を主として)
- 第三時 練習應用。

教具

小刀・鋏・剃刀・庖刀・鑿・鉋・チャウナ・鋤・鎌・押切・刀・長刀等の實物・模型又は繪畫。

教法

(甲) 教授上の注意

- 一、本課は刃物の種類及び之をつくる材料即ち鋼鐵につき知らしめようといふのがその主眼點である。併し之に附帶してそこに現れてゐる刃物の用途について知らしめることも必要なことである。
 - 二、文字・語句等については次に示す所に基き、平易に説き、明確に知らしめる。
- (一) 漢字
- 「刃」——指事文字で、刀と、との合字である。即ち刀に、を施して、此處が物を切るべきハチキだぞと指示したのである。漢音は「ジン」、吳音は「ニン」で、訓は「ヤイバ」。「ハモノ」等である。

「級」——形聲文字である。本義は絲が順次に重つてゐる義、故に絲扁をかく。轉じて等級・階段等の義となす。又昔秦が敵の首を獲る數に従つて位を上げた所から敵の義にも用ひる。及キウはまた音符である。音は「キフ」で、訓は「シナ」等である。

「舉」——會意形聲文字である。兩手で物をさ、げあげる義である。故に與トキニスと手とを合せて文字とした。轉じてホメアゲ、拔擢する等の義とした。又與に通じて、トモニ、コゾリテ等の義にも用ひる。漢音は「キヨ」、吳音は「コ」で、訓は「アゲ」等である。

「工」——指事文字で、二と一との合である。二は天地で、一は人である。人が天地の氣をうけて規矩ある義である。又工は定規の貌で、之を持つものは諸器具の製作者であるから、工を諸匠の義ともする。又定規を用ひると器具が巧みに出来る所から巧飾の義ともする。漢音は「コウ」吳音は「グ」で、訓は「タクミ」・「ワザ」・「サイク」等である。

「農」——形聲文字で、畝と辰との合字である。辰は晨の古文字で、農夫が晨に出て、田を耕す義である。故に晨をかく。畝は音符である。慣習音は「ノウ」である。

「鎌」——形聲文字である。兼は音符。音は「レン」で、慣習音は「ケン」で、訓は「カマ」である。

「鋼」——形聲文字である。鍛鍊した鐵で、ハガネのことである。岡は音符である。音は「カウ」で、訓は「ハガネ」である。

(二) 語句

「或小學校の三年級で先生がみんなに問ひました」——こゝでは「此の學年は自分等と同じ學年である。自分等の學級で、自分等の先生が自分等に問はれるあの時のやうに問はれたのだな」といふ風に自己の經驗と交渉して其の境地を想起さる。

「小刀や、はさみや、かみそりやはうちやうのやうな物を何といひますか」——こゝでは此等の用途の大體につき、兒童の知識・經驗と交渉して問答する。深入してはいけない。

「しばらくの間は誰も手を舉げるものがありませんでした」——こゝでは生徒の誰も「何故手を舉げないのか」を考察させる。實は此の間はちつと無理である。熟練した問とは見られない。こんな問に對しては假令「刃物」だといふことが分つてゐても言下においそれと答へることは六つかしい。

「その中、一人の男生が」——優等兒と見るべきか。

「刃物」——この語の説明はこゝに態々なさなくてもよい。次に説明してあるから。

「刃」——刀・小刀等すべて切物に於て、薄く鋭くなつて物を切る部分をいふ。

「又一人の男生が」——これは前に「刃物」と答へたその兒童であらう。

「農具」——百姓が田畠を耕すときに用ひる鋤・鍬の類を云ふ。また草を刈つたり、葉を切つたり

りする鎌・押切の類をもいふ。

「すきや、くはや、鎌や、おし切があります」——繪畫・模型・實物等を示して、其の觀念を明かにし、またそれ等の用法につき簡短に話す。

「一人の女生が」——前には同一の男生が三べんも答へて居る。こゝで初めて女生が指名されて答へた。大工の道具や百姓の農具については、女生側には一名の知り人がなく、軍用の刃物については男生側に一人の知り人がないことになつて居る。

「刀やなぎなた」——此等の實物又は繪畫・模型等を示して、其の觀念を明かにする。

「鐵で造ります」——この答は多く手をあげた内で、一名の女生が指名されたことになつて居る。

「鋼鐵」——鐵には其の精製によつて、鑄鐵・鍛鐵・鋼鐵等の種類がある。其の中で鋼鐵といふのは、鑄鐵の炭素量を減じ、或は鍛鐵に炭素を加へて得る鐵をいふ。其の質硬く刃物をつくるに適する。(第二十七課「ヤクワントテツピン」の備考部参照)

「かぢや」——農具や刃物などを造る人又は家。

「この時には男生も女生も残らず手を舉げました」——鍛冶屋だけは皆知つてゐると見えて皆舉手した。

三、本課は教室に於ける教授の實際を寫した文章と見なければなるまい。教授の目的は前課と連

絡して、鐵の利用即ち刃物について、之が觀念を與へ、また之をつくる鐵の一種即ち鋼鐵についても知らしめようと言ふのであらう。學級の兒童は都會兒にもとれるし、また田舎兒にもとれる。これはどちらでもよい。旗色の鮮明でない所が却つて都合がよい。教授の時間は讀み方の時間であるか、或は特設の事物教授の時間であるか、そのあたりは分りにくい。しかし本課については、勿論さうした所まで吟味しなくてもよい。刃物の教授については、作者の初めからの考が、兒童の殆ど全部が之を知らないといふ豫定であるらしく思ふ。それは

「誰も手を舉げるものがありませんでした」

「その中の一人の男生が」

「又一人の男生が」(前の男生と見られる)

「その子が」

「一人の女生が」

といふ風に、教師の間に對し答へ得るものが一二人しかゐないからである。かうした考の是非は分りにくいけれども、私共の考では今少し多くの兒童が知つて居ることにして記述して欲しい。即ち

「その中、一人の男生が」——これは此の儘にして置く。何となれば「小刀や、はさみや、かみそりや、はうちやうのやうな物を何といひますか」といふ問が既に六つかしいから。かうした問には假令多く知つてゐても、言下にそれと答へにくいからである。

「又一人の男生が」——之は省いて、男生のみや、かなや……あります」とする。

「その子が」——之も省いて、男生すきや、くはや……があります」とするか。又は女生すきや、くはや……があります」とする。

併し右は作者は形式上の修練即ち句法の變化の上から

「その中、一人の男生が」

「又一人の男生が」

「その子が」

女生鐵で造ります」

といふ風に記述したのかも知れない。果してさうとせばそこに意義を有するものと見なければならぬ。

其の他記述上に於て

「この時には男生も女生も残らず手を舉げました。」

とあるが、餘り拵へすぎた憾みがある、又物や農具や刀槍に對する疎らな舉手に對照して、最後の鍛冶屋に對し全部の賑かな舉手は餘り面白くない。一考を要求する。しかしこゝにかうした批判を試みてゐた所で、何にもならない。實際教授に於ては忠實に作者の考に一致して有効に授けなければならぬ。

四、本課は對話式の文章であるから、他の文と對話との區別を明かにし、この種の文章の讀解に習熟させるやう注意しなければならない。その他教材の區分は全體法によるを可とする。

(乙) 教授の實際

第一時

▽全文を授く。

- 一、各自をして自由に一讀させる。
- 二、質疑に答ふ。主要の語句・語法等につき問答する。

(一) 主要の語句

或或小學校 三年級 かみそり 手を擧げるもの 男生 種類 大工 ちやうな 農具 すき くは
 おし切 刀 なぎなた 綱 かぢや……等

(二) 語法

小刀や はさみや かみそりや…… 何といひますか 又があるから又物といふのです それから農具にはよろしい。又物は……

手を擧げるものがありません。

手を擧げるものがありませんでした。

又物があります。

いろいろあります。

又物がありませんか。いろいろありませう。

三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に二三回よまさせる。

四、實物・繪畫・模型と交渉して内容の吟味を行ふ。

五、誦讀の練習を行ふ。

第二時

▽全文を授く。

- 一、一兒童をして讀ませせる。
- 二、質問に答へ、また教師より主要の語句等につき問答する。
- 三、全文を自由に一回讀ませせる。
- 四、内容を一層深く吟味する。

(教授上の注意)「二」「三」を参照して)

五、読み方を練習する。

第三時

▽練習應用。

一、各自をして自由に一讀させ、終つて質疑に應答する。

二、次の問を本を讀んで答へさせる。

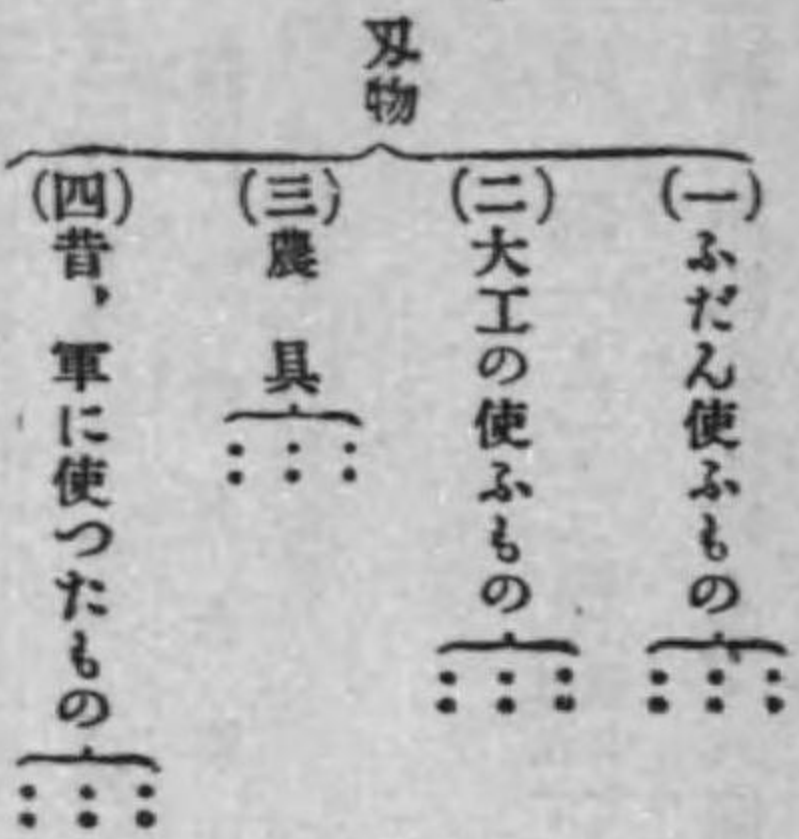
- 1、先生が「小刀や、はさみや、かみそりや、はうちやうのやうな物を何といひますか。」と問はれたときに、一人の男生は何と答へたか。
- 2、先生が「大工の使ふ道具にはどんな刃物がありますか。」と問はれたときに、又一人の男生が何と答へたか。
- 3、先生が「それから農具には」と問はれたときに。
- 4、先生が「昔軍に使つた刃物には」と問はれたときに一人の女生は。
- 5、先生が「刃物は何で造りますか。」と問はれたときに、また女生は。
- 6、刃物はどんな鐵で造るか。それを知るには先生のお話のどこを。

三、練習應用。

(一)漢字の書取

小學校 三年級 先生 小刀 誰 手を舉げる 刃物 道具 種類 大工 農具 鎌 女生 鋼鐵

(二)次の點線のところに、刃物の名を書かしめる。



(三)假名遣の正誤

ほうちよう そうです ちような くわ ありましよう じや

四、次の問題の下に話方の練習を行ふ。

- 1、刃物とは。
- 2、刃物の種類には。

第二十九 太郎の日記

要旨

形式上では新文字の読み方、書き方難語句の意義、語法等につき授けて本文の讀解に習熟させ、また日記の認め方も知らしめる。内容上では日記の必要をさと、之を認めようとする心を養ふ

を以て要旨とする。

教材

太郎の日記

二月十五日 日曜 晴 今日はおちの大きうちの日で、手ぬぐひをかぶつて、手つだひをした。ゆか下から、去年なくしたまが出たのはうれしかった。うちが大そうきれいになった。ゆにはいつて、ごはんを食べて、早く寝てしまった。

二月十六日 月曜 雨 道が悪かった。學校で佐太郎の話聞いて、人のためをはかつてやらなければならぬと思つた。

二月十七日 火曜 晴 いけにあつい氷がはつてゐた。一日北風が吹通して寒かった。

二月十八日 水曜 曇 學校から歸つてから、をばさんの所へ使ひに行つた。をばさんから塩せんべいをいたゞいた。

二月十九日 木曜 雪 朝から雪降りて九時頃には四五寸も積つた。學校で、雪なげをして、白の組が勝つた。

二月二十日 金曜 晴 風が無く暖かい日であつた。午前六時の汽車で、おとうさんが大阪へお立ちになつた。うぐひすがにはの梅の木に来て鳴いた。

二月廿一日 土曜 雨

二月廿二日 日曜 晴 午後、大阪からおとうさんの繪葉書が着いた。

(新字) 記 曜 月 火 氷 午前 阪 廿 後 繪

區分

- 第一時 第一・二・三節(自九十一頁七行)を授く。
- 第二時 第四・五・六・七・八節(自九十三頁四行)を授く。

第三時 練習應用。

教法

(甲)教授上の注意

- 一、本日記に於ては、其の日〳〵に記入してある事柄の何たるかは勿論、日記に記載すべき條件と其の記載の形式とを知らしめることが教授の要件である。
- 二、日記に記載すべき條件は、學年の程度上
 - 1、月日。曜日。天氣。
 - 2、其の日にあつた主要の事件。
 であるとしめる。
- 三、併し(2)項に於て何も記載すべき事件のなき日、またあつても記載する程の事件でないときは記載するに及ばぬことを知らしめる。本課に於て「二月廿一日 土曜 雨」としてあるのは即ちそれである。
- 四、日記の文章は出来るだけ簡短に明瞭に記すべきことを知らしめる。また記入は毎日之を嚴格に實行し、時刻は其の日の終即ち夜分に、または翌日の朝を可とする旨を知らしめて置く。

五、文字・語句等については、次に記する所に基き、平易に説いて、明確に理解させる。

(一) 漢字

「記」——形聲文字である。一々分別して其の言を書き記す義である。轉じて文書、記號等の義とした。己は音符である。音は「キ」で、訓は「シルス」である。

「曜」——形聲文字である。日光が耀く義である。故に日扁をかく。翟チキは音符である。音は「エウ」で、訓は「ヒカリ」である。

「氷」——會意形聲文字である。本字は冰である。ノはコホリの義であるが、後世水を加へて氷とし之が變じて氷とかくに至つたのである。音は「ヒョウ」で、訓は「コホリ」である。

「阪」——形聲文字で、山のサカの義である。漢音は「ハン」で、吳音は「バン」で、訓は「サカ」である。

「繪」——會意形聲文字である。五采の絲を會せて繡をする義、故に糸と會とを合す。轉じて「イロドル」又は「エ」の義となつた。會は音符である。漢音は「クワイ」で、吳音は「エ」で、訓も「エ」である。

(二) 語句

「日記」——其の日其の日の出來事を記するをいふ。又その出來事を記した手帳をいふ。こゝは

乙者の場合である。

「日曜」——日曜日ニチヨウの略である。

「今日はうちの大きうちの日で」——「うち」は我が家をいふ。「大きうち」は普通の掃除でなく、家の天井床下、その他、隅から隅までを掃除するをいふ。「大きうち日」は毎年此の日即ち二月十五日を以て、之としてきめてあるのではなからう。大體二月にはいつて春の大掃除を行ふこととし、二月十五日は幸ひ日曜日でもあるし、天氣もよかつたなら大掃除をしようと前日に定め當日に行つたといふ譯であらう。

「ゆか下」——「ゆか」は家の中に地から二三尺離れて根太をわたし、其の上に板などを張つたものをいふ。従つて「ゆか下」は床の下をいふ。

「うちが大そうきれいなつた」——此のときの氣持をよく想起させる。

「早くねてしまつた」——晝の活動でつかれたからだを知らせる。

「佐太郎の話を聞いて」——修身の時間に彼の民衆のためを圖つた佐太郎の話をきいたのである。どんな内容であるか、既に教へてあれば之を問ひ、無かつたらその大要を語るがよい。

「人のため」——どんなことが人のためであるか、二三の實例をあげて内容を明かにする。

「北風」——冬に吹く寒い風をいふ。

「塩せんべい」——米の粉に塩を加へ、これをこねて普通の煎餅のやうに焼いたものである。

「學校で雪なげをして」——雪投げの方法につき土地の習慣、兒童の經驗に基いて問答し其の時に於ける壯快な光景を想起させる。

「大阪」——我が國に於ける三大都市の一で、商業、工業の發達した般賑な土地たることを知らしめる。

「うぐいすがはびの枝の木に来て鳴いた」——二月十九日には朝から雪が降つて四五寸も積つたとあるから、翌日即ち二十日には暖い日であつても雪は尙残つてゐたらうと思ふ。かうした時に鶯は笹の宿から出て来て、此の庭の梅を訪問したかどうかは、北國の地方の子供等は一寸疑問にするかも知れない。注意して授ける。

(三) 語法

早くれた。

早くれてしまつた。

人のためをはかつてやらなければならない。

人のためをはかつてやらなければならないと思つた。

一日中北風が吹いてゐた。

一日北風が吹通してゐた。

塩せんべいをいただいた。

塩せんべいをもらつた。

六、日記文は本來から言へば公開的のものでなく、各自々々の祕密に屬する。併し特種の目的即ち特に公開せんとしての種類に屬する日記は公開して差支なきは言ふ迄もない。本課に於ける日記はどつちかといへば勿論甲者に屬する。併しこゝに敢て公開したのは特殊的目的を有するからである。

七、記述上に於て、

二月十五日

「手ぬぐひをかぶつて」

「うちが大そうきれいになつた」

「ゆにはいつて」

「ごはんを食べて、早くねてしまつた」

「ゆか下から、去年なくしたこまが出たのはうれしかつた」——子供らしい所が見えて面白い。

二月十七日

「一日北風が吹通して寒かつた」——簡短な筆滴によく身をさすやうな寒威が表はれて居る。

よく大掃除のときの特徴をとらへてかいてある。

二月十九日

「朝から雪降りて、九時頃には五寸も積つた。學校で雪なげをして白の組が勝つた」——雪降る朝の子供等の喜び、雪合戦の壯快、勝つた組の萬歳の叫び、後で冷めたくて困つてゐる子供の様子があり／＼と目の前に見える。

以上の諸點は殊に注意して授ける。

(乙) 教授の實際

第一時

▽第二・三節を授く。

- 一、目的を指示して、第一節即ち二月十五日の日記を自由に一讀させる。
- 二、彼等の質疑に答へ、また教師より主要の語句語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に二三回讀ませる。
- 四、尋究を行ふ。
 - 1、内容の感味。(教授上の注意の「七」参照)
 - 2、日記の形式につき吟味。
- 五、誦讀の練習。

個人的に、また自由に。

(注意) 第二・三節(二月十六日・二月十七日の分)も右に準じて取扱ふ。

第二時

▽第四・五・六・七・八節を授く

(第一時に準じて授く)

第三時

▽練習應用。

- 一、各の日の日記を指名して讀ましめ、そこに於ける質疑に應答する。
- 二、各の日の日記に基いて、日記をかくときの條件及び認め方等につき問答し、それ等につき總合的に知らしめる。

1、條件につき。(教授上の注意「二」及び「三」参照)

2、文章につき。(同上「四」参照)

3、日記の必要を認める時刻等につき。(同上)

4、認める形式につき……其他。

三、練習應用。

(一) 漢字の書取。

第二十九 太郎の日記

日記。 金曜日。 去年。 學校。 氷がはる。 塩せんべい。 白の組が勝つ。 大阪。 廿一日。 繪葉書……等

(二) 假名遣。

きうち。 手ぬぐひ。 手つだひ。 大そう。 をばさん。 おとうさん。 うぐひす……等。

(三) 語句の適用。(短文作爲)

人のためをはかつて…… 吹通し。 いただいた……等。

〔注意〕兒童をして之から各自の日記をかくやう注意を與へる。

第三十 繪葉書

要旨

形式上では新文字の読み方、書き方、難語句の意義、語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では繪葉書の説明を通して、我が國三大都市に於ける名高い神社、佛閣・停車場・港灣・城址・公園・動物園等につき知らしめて、地理的・歴史的趣味を養ひ、傍ら繪葉書等を蒐集する趣味をも養ふを以て要旨とする。

教材

第三十 繪葉書

私ハ去年ノ正月カラ繪葉書ノ集メテキマスガモウ三十枚程タマリマシタ。ソノ中テ、東京ト大阪ト京都カラ來タノガ一番タク

サンアリマス。

コレハ東京驛ノ繪葉書デス。日本一ノ大キナ建物ダトイヒマス。向ツテ右ノ方が入口、左ノ方が出口テ入口ト出口ノ間ガ百間

餘リモアルサウデス。

コレハ上野公園ノ花盛ノ繪葉書デス。松ヤ杉ノ中ニマジツテ、櫻。花ガマツ白ニ咲イテ、花見ノ人が大勢出テキマス。

動物園ノラクダノ繪葉書モアリマス。私ハコレテ初メテ、クダトイフモノヲ知ツタノデス。

大阪ノ川口ニ汽船ノタグサン出入リスルアリ様ナウツシタノガアリマス。ソレヲ見ルト、大阪ノ商業ノ盛ナコトガ分リマス。

又大阪城ノ繪葉書ヲ見ルト、ソノ石ガキノ石ノ大キナノニオドロキマス。サウシテ豊臣秀吉ノ事ヲ思ハズニハ居ラレマセン。

次ノハ京都ノ御所ノ南ノ御門テ、建禮門トイヒマス。

コノ二枚ノ中、一枚ハ三十三間堂テ、一枚ハ北野ノ天ジン様デス。天ジン様ノオヤシロニハ、讀本ニアツタ通り、タグサン梅

ノ木ガ植エテアリマス。

東山ヲ一目ニ見タ繪葉書モアリマス。アチコチノ木ノ間ニ御宮ヤ御寺ガ見エテ、マコトニ美シイケシキデス。

〔新字〕 京 都 驛 建 公 園 動 物 園 業 城 建 堂 讀 本

區分

第一時 第一段(自九五頁一行)至九十七頁五行)を授く。

第二時 第二段(自九十七頁一行)至九十九頁一行)を授く。

第三時 第三段(自九十九頁二行)至百頁七行)を授く。

第四時 全文の復習及び應用。

教具

日本地圖 東京市街地圖 大阪市街地圖 京都市街地圖 東京停車場・上野公園・大阪河口・大阪城・京都御所・三十三間堂・北野神社・東山等の寫眞又は繪葉書・駱駝の掛圖等。

教法

(甲) 教授上の注意

- 一、本課は此の後我が國三大都市の地理を授けんとときの準備に、また地理的、歴史的の趣味を養はんがために選擇した教材である。傍ら蒐集慾をも喚び起さうといふ要求もある。
- 二、併し本課を取扱ふには、神社、佛閣、港灣、城址、公園、停車場等につき細説するを要しない。兒童の心理に顧み興味中心で授けて行くがよい。之はまた作者の精神でもある。
- 三、本課の如き感覺的材料にあつては、繪畫、寫眞等の準備を決して怠つてはならない。また可能の土地に於ては必ず該地に率ゐていつて、其の實物を直觀させ、然る後本文にいるやうにする。
- 四、文字、語句については、次に示す所に基き、平易に説き、確實に知らしめる。

(一) 漢字

「京」——會意文字である。高の省畫と巾の合字である。人のつくつた最高の丘の義である。故に古をかく。巾は丘の形である。轉じて高く大なる義とし、更に君主の居城のある地即ちミヤコの義とするに至つた。漢音は「ケイ」吳音は「キヤウ」で、訓は「ミヤコ」である。

「都」——形聲文字である。宗廟のある邑を都といひ無きを邑といふ。轉じて廣くミヤコの義とした。者は音符である。漢音は「ト」吳音は「ツ」で、訓は「ミヤコ」である。

「驛」——形聲文字である。置騎也と註してある。宿場からつぎたてる車馬の義である。驛は音符である。漢音は「エキ」、吳音は「ヤク」である。

「建」——會意文字で、律の省畫と廼との合字である。朝廷が法律を立てる義である。故に律をかく。廼は行ふまで即ち廣く天下に行ふ義である。漢音は「ケン」吳音は「コン」で、訓は「タツ」である。

「公」——會意文字で、八とムとの合字である。ムは私の本字で、八は背く義である。即ち公は私に背き平等に分つ義である。又私利に反對して正しい義である。轉じてオホヤケ、官府、官事等の義とし、又天子、神祇、長者、同輩等の敬語となすに至つた。漢音は「コウ」吳音は「ク」で、訓音は「オホヤケ」である。

「園」——形聲文字である。果樹を植ゑる地で、四方に垣ある意義の文字である。即ち□は

四方の垣の義を示す。袁は音符である。漢音は「エン」吳音は「ラン」で、訓は「ソノ」である。

「業」——象形文字である。鐘磬を懸ける大版を象つたものである。此の版を書寫の版等の版に通じて、すべて之を業といひ、更に轉じて版を以て行ふ仕事の義となすに至つた。漢音は「ゲフ」吳音は「ゴフ」で、訓は「ワザ」「ナリ」「ナリハヒ」「スデニ」等である。

「堂」——形聲文字で、尙と土との合字である。宮殿の義で、昔は陽に向つて建て、位階の高下によつて其の土臺の高さを異にしたものである。故に土をかいて其の意を示す。天子は九尺諸侯は七尺、大夫は五尺、士は三尺の制であつたといふ。後轉じて神佛を祀れる高樓の義又は威儀の整つた姿等に用ひる文字となつた。尙は音符である。漢音は「タウ」吳音は「ダウ」で、訓は「タカドノ」である。

(二) 語句

「繪葉書」——通信文を認める面に人物、風景、建築物、動植物等の繪をすつた葉書をいふ。故に通信文は宛名を認める面の二分の一以下に認めることになつて居る。

「東京」——我が國三大都市の一つで、首府のある所である。地圖によつて其の位置を示し、宮城、官衙、學校、兵營、公園、停車場、貴紳の邸宅等の所在につき語る。次の大阪、京都の二市についても、之に準ずる。

「東京驛」——掛圖等を示して大體次の事柄を語つてきかせる。

- (1) 東京市にあつて、東洋第一の大停車場。
- (2) 赤煉瓦でつみあげた三階造の大建物。
- (3) 間口が百八十四間、奥行が十一間乃至二十二間、
- (4) 向つて右が入口で左が出口。
- (5) 中央の室は帝室用になつてゐる。階下には待合室中央郵便局の分室、賣店、洗面所、食堂などがあり、階上にはホテル、役所などある。
- (6) 毎日乗降りする旅客は約八千人。
- (7) 明治四十一年三月起工、明治四十五年三月竣工。
- (8) 總費用約三百萬圓。

「上野公園」——繪畫等と交渉して大體次の事柄を知らしめる。

- (1) 東京市にあつて、廣さ約二十五萬坪。我國で一ばん大きな公園。
 - (2) 鬱蒼たる老樹多く、殊に年經た櫻樹が多くあつて、花の時には全園花見の人で滿てること。
 - (3) 東京帝室博物館、動物園、南洲翁の銅像、不忍池等があること。
- 「動物園」——現今帝室博物館に屬し、内外の珍禽、奇獸を飼育し、公衆の縦覽に供し、學術上

の參考に資することになつて居る。面積約七千坪ある。

「ラクダ」——偶蹄類中反芻類に屬する獸である。形大で長頸長足である。性温順で力強く、よく使役に適する。殊に數日の渴を忍び得るが故に、沙漠の旅行に大切な獸として飼養される。三種あつて、一は亞弗利加及び亞刺比亞に産する單峰駝で、一は中央亞細亞に産する雙峰駝で、今一つは南亞米利加に産する無峰駝である。繪畫等と交渉して形態、習性の一斑を知らしめる。

「大阪ノ川ロニ汽船ノタクサン出入スルアリ様ヲウツシタノガアリマス」——讀本の挿繪は川口(安治川)に於ける「出船千艘、入船千艘」ともいふ帆檣林立の狀を寫したものである。向つて右は安治川の左岸で、左は其の右岸である。大厦高屋は橋の間から見えて居る。右岸の尖れる建物は大阪商船會社事務所である。瀬戸内海、九州、四國方面へ向ふ汽船の發着所で、旅客の出入甚だ繁い。

「大阪城」——市の東端にある。一代の英雄豊太閤が、精力と財力とを盡して築いた名城である。秀吉薨去の後、秀頼、徳川家康と隙を生じ、家康は外城を毀ち、濠を埋めた。後秀頼再舉を圖つたけれども利あらず、秀吉の創築以後三十三年にして、城遂に陥り、建物大半焼失し、豊公の遺臣千秋の恨を吞んで斃れた。今は第四師團を置き内に師團司令部がある。大手口から入つて本丸に進まんとする櫻門突當りの袖石は城内用材の最大なもので、縦四十四尺、横十五尺

面積約十六坪ある。花崗岩である。土木、交通共に幼稚な當時に、かうした大工事を遂行せし豊公の威勢の如何に大であつたかは想像するに餘りある。さしもの霸業も、一炊の夢と化した英雄の末路は眞に憐れむべきではあるまいか。

「京都ノ御所ノ南ノ御門ヲ建禮門トイヒマス」——御所は市の北端にある。東西百三十七間餘、南北二百四十六間餘ある。淡褐に白線を劃せる筋壁、四方を包み、九重の雲深うして庶民の窺知るべきでない、墻壁を隔て、僅かに殿宇の臺を望み得るのみである。南に面するを建禮門と稱し、之が正門である。東に建春門、西に宣秋門、北に朔平門がある。内には紫宸殿、清凉殿、宣陽殿、常御殿の建築物があつて莊嚴を極め、また林泉花木の配置巧緻を盡してある。紫宸殿の前面を南庭と稱し、階下に左近の櫻、右近の橋がある。有名な賢聖の障子は紫宸殿の内にある。

「三十三間堂」——大佛境内にあつて、天台宗蓮華王院と稱する。本尊は千手觀音で、康慶の作である。本堂は長棟作で、南北六十間ある。二間を隔て、柱を建ててあるから三十三間堂といふ身長四尺の二十八部衆の外、千手觀音一千體を安置してある。洛東一の古建築物である。

「北野ノ天ジン様デス」——市の西北にある。祭神は菅原道真で、天曆元年村上天皇の初めて北野に奉祀し給ふ所、官幣中社で、境内に老松、老梅多く、其の満開の候は實に清雅である。

「東山」——京都市の東方一帯の山叢を總稱して俗に東山といふ。山脈は如意嶽に起り、逶迤として南に走り、稻荷山に至る。其の間三十六峯あつて、山容溫藉、毫も峭峻の状がない。本當に「ふとん着てねたる姿や東山」といふ句の通りの山姿である。

「アチコチノ木ノ間ニ御宮ヤ御寺ガ見エテ、マコトニ美シイケシキデス」——三十三間堂、豊國神社、大谷廟、智恩院、平安神宮等が見えるのをいふ。本挿繪は夷川橋詰から東山を見た寫眞で、橋は二條橋で、河は賀茂川である。

五、本文章は繪葉書一枚々々につき説明したことになる。而して其の説明の形式は

(一) 東京驛と上野公園は同一の形式によつて説明してある。

(二) 動物園。大阪の川口、大阪城は其の形式各、違つてはゐるが、どれにも自分の所感が加へてある。

(三) 御所の建禮門、三十三間堂、北野神社は一口的の説明になつて居る。かうした形式上の變化にもよく注意し指導する所なければならぬ。

六、本課の區分は部分法によるがよい。何となれば繪葉書一枚々々について説明したので、各葉書其の間に生命の連続がないからである。併し、分量上多少云々の文句があつても、東京、大阪、京都の三段に分けて授け、後に全體を總括して授けるといふ方針が適當であらうと思ふ。

(乙) 教授の實際

第一時

▽第一段を授く

一、第一節總叙を自由に一讀させる。

二、質疑に答へ、また主要の語句等につき問答する。

三、讀み方を檢閲し、自由に一・二回讀ませる。

四、内容につき吟味する。

日本地圖を掲げ、東京、大阪、京都の位置を示し、平易に簡明に各都市の特色を語る。

五、誦讀——一・二名に。

六、第二節(東京驛)を自由に一讀させる。

七、彼等の質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。

八、讀み方を檢閲し、後自由に一・二回讀ませる。

九、内容を吟味する。

東京驛の擴大圖、寫眞等を示し教授上の注意「四」に記する所を参照し、興味中心にして授く。

一〇、誦讀——一・二名。

(注意) 第三節(上野公園)、第四節(動物園)も第二節に準じて授ける。

一、第一段をまとめて誦讀させる。

(1) 個人的に、(2) 自由に。

第二時

第三時

(第一時に準じて授く)

第四時

▽總括的復習及び應用

一、各段毎に指名して讀ませる。

二、質疑に答へ、また主要の語句、語法等につき問答する。

三、内容の要點につき問答する。

内容を一層明確にすると共に、地理的、歴史的の興味をそゝり、傍ら蒐集的趣味を養ふに努める。

四、記述の形式につき吟味する。

各、を比較して、其の異なる點を語り、思想表出の多様なることを理解させる。

五、誦讀の練習を行ひ讀解に習熟させる。

(1) 個人的に、(2) 自由に。

六、練習應用。

(一) 漢字書取。

繪葉書	去年	東京	大阪	京都	東京驛	建物	百間餘り	上野公園	櫻ノ花	大勢	動物園
汽船	商業	大阪城	建禮門	三十三間堂	木ヲ植ヤ	……等。					

(二) 次の點線をうづめて纏つた文章にさせる。

(1) コレハ東京驛ノ繪葉書デス。……トイヒマス。

(2) 大阪ノ川口ニ……チウツシタノデス。

(3) 大阪城ノ繪葉書ヲ見ルト……ニオドロキマス。

サウシテ……思ハズニハ居ラレマセン。

(4) コノ二枚ノ中、一枚ハ……デ、一枚ハ……デス。

七、挿畫又は掛圖によつて話方の練習を行ふ。

(注意) 若し時間が不足するやうであつたら、「六」の練習應用を家庭課題とし「七」を省く。或は特に一時間をさいて「六」と「七」とを學校で課することにしてもよい。

第三十一 二人のでつち

要旨

形式上では難語句の意義、語法等につき知らしめて、本文の讀解に習熟させる。内容上では人は常に正直であるべきこと、殊に商人にあつては殊更大切な道德であることを知らしめる。

教材

第三十一 二人のでつち

正造と長松は同じ店のでつちであつた。或日、主人は外へ出て、二人が店のすを^すしてゐた。そこへ一人の客が来て、いろいろな買物をして歸つた。正造は後でつりを一錢少く渡したことに氣が附いて、

「おや、今のお客にもう一錢上げなければならなかつた。」

と言つて、すぐに追ひかけて行つた。歸つて來ると、長松は笑つて

「たつた一錢ぐらゐのことだから、だまつておいてもよかつたのに。」

と言ふと、正造は

「そんな事が出来るものか。一錢だつてもちがつた金を取つてはならない。」

「それでも御主人が居ないから、だまつてゐれば誰し知りはしない。」

「御主人がおるすだから、なほさらまちがひがあつてはならない。」

と言つても、長松はまだ笑つてゐた。後になつて、主人はこの事を聞いて、正造をほめて、長松をしかつた。

〔字〕 造 錢

區分

第一時 全文を授く。

第二時 練習應用。

教法

(甲) 教授上の注意

一、本課は修身的教材に屬する。従つて本教材を通じて、一般に人は正直であらねばならないことを諭すは勿論だが、殊に商人にあつては、勤勉・機敏と共に大切な徳義であることを知らしめる。本課の要求はかくあることによつて一層充實するのである。

二、文字・語句については、次に示す所を参照し、平易に説き、明確に知らしめる。

「正造と長松」——^{シヤウバウ}丁稚の名。年齢は十五六歳の少年と見、商道を見習うて、後によき商人にならうといふ考で、今丁稚になつてゐるのだと知らせる。

「いろいろな買物をして歸つた」——然るべき店とその買物を各自に想像させる。

「つり」——客が買物をして、其の物の代價より餘計の金を出したとき、其の金の内から代金を引去つて残を渡す、その残金を「つり」といふ。

「一錢少く渡した」——一錢の金を以て何に些少の金をと思ふことはならない。正直の徳は一厘一毛の上にもあるのだからと知らせる。

「おや、今のお客にもう一錢上げなければならなかつた」——こゝに正造の正直が現はれてゐるから十分味はさせる。

「歸つて來ると、長松は笑つて」——この笑は是非か批判させる。

「たつた一錢ぐらゐのことだから、だまつておいてもよかつたのに」——長松の不正直な心の現はれてゐる所、十分注意させる。

「そんな事が出来るものか。一錢だつてまちがつた金を取つてはならない」——こゝは正直は大なる物の上のみ宿つてゐて、小なる物の上に宿つてゐないといふそんな譯のものでない。假令一厘一毛の小でも、人の物とあれば決して取つてはならないといふ、正造の考の正しいことを語つたのである。十分感味させる。

「それでも御主人が居ないから、だまつてゐれば誰も知りはない」——さきには「たつた一錢

ぐらゐ」といひ、こゝには「御主人が居ないから」といふ、長松の曲つた心が益々濃厚に現はれて居る。十分注意して授ける。

「御主人がおるすだから、なほさらまちがひがあつてはならない」——行は明暗によつて違はしてならないといふ所である。彼の四知の故事位をひいて説明したなら、此の言の價値が一層徹底的に分るであらう。

「長松はまだ笑つてゐた」——腹の黒い笑が、明かな腹の人を笑ふのだから面白い。十分批判させなければならぬ笑である。

「後になつて、主人はこの事を聞いて、正造をほめて、長松をしかつた」——最後の此の判決に重きを置かなければならない。

三、本文は對話式の叙述であるから、地の文と對話との區別を明かにし、之が誦讀に習熟させる。

四、本課は善惡二元の戦と見てもよい。即ち正造は善の方で、長松は惡の方である。戦の結果は主人の判決によつて、善が勝つたのである。

おや今のお客に、もう一錢上げなければならなかつた。善

たつた一錢ぐらゐのことだから、だまつておいてもよかつたのに。二元の葛藤(一) 惡

そんな事が出来るものか。一錢だつてまぢが
つた金を取つてはならない 善
二元の争闘(二)

それでも御主人が居ないから、だまつておれ
ば誰も知りはない。 悪

御主人がおるすだから、なほさら 善
まぢがひがあつてはならない。 二元の戦ひ(三)

長松はまだ笑つてゐた 悪

正造をほめて、 善者の勝利
長松をしかつた。 悪者の懲戒
戦闘の結果

五、本課は讀替の文字が二つあるけれども、大體に於て練習文と見てよい、従つて二時間位の配當で十分だと思ふ。

六、本課は對話の練習に適してゐるから、二人を對立させて、之が修練を行ふこともよい。而して對話の際善者は悪者を道義の上から説明せんとし、悪者は善者を無理にでも壓迫せんとし、意氣込で對話させる。

(乙)教授の實際

第一時

▽全文を授く。

一、各自をして自由に一讀させる。

二、質疑に應答する。また主要の語句等につき問答する。

三、讀み方を檢閲し、後各自をして自由に一・二回讀まさせる。

四、内容の吟味を行ふ。

1、正造と長松とが丁稚になつた考へ。

2、正造の正直な點。

3、長松の不正直な點。

4、主人の判決。

5、正直の徳の大切なること。

等につき十分吟味し、また批判させる。

五、誦讀の練習を行ふ。

六、次の問を讀んで答へさせる。

1、正造の正直な心は本のどこにどう現はれてゐるか。

2、長松の不正直な點は、

第二時

▽練習應用

第三十一 二人のでつち

一、一讀させて、質疑に答へ、また主要の語句等につき問答する。

二、内容につき尋究する。
1、二元の争闘につき。
2、二者の行動の批判。

三、練習應用。

(一)漢字書取

正造 長松 主人 一人の客 買物 氣が附く 歸つて来る 一錢……等。

(二)語句の適用(短文作爲)

たつた…… ……だつて 知りはしない なほさら

(三)次の點線をうづめて、ましまつた文にさせる。

- (1)おや、今のお客に………。
- (2)たつた………ぐらぬのことだから………。
- (3)そんなことが出来るものか。………だつて………。
- (4)それでも………居ないから、………。
- (5)………がるすだから………。

第三十二タヒ

要旨

形式上では、新文字の讀み方、書き方、難語句の意義、語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では、鯛の形態・習性・用途等につき知らしめ、兼ねて自然を好愛するの念を養ふ。

教材

第三十二タヒ

タヒハ美シキ魚ニシテ、力モ強シ。五六寸ノ小ダヒヲツリ上グルニ、一尺ニモ餘ル魚カト思フ程ノ手答アリ。タヒノ群ヲナシテオヨグヲ見ルニ、大小ノ順ニヨリ、前後ニ正シキ列ヲナシテ進ム。ソノ時最モ小ナルモノノ最モ後ヨリシヤガヒ行クハ、マコトニカハユシ。我が國ノ海岸ニハ、海ノ入りコミタル所ニアミチハリテ多クノタヒヲ養ヒオク所アリ。一ツカミノイロシナゲコメバ、幾千ノタヒ一時ニ集リ來リ、大小入りミダレテ奪ヒ合フ様ノ目ザマシサハ、コヒノフチアラソフ比ニアラズ。イロシチ食ヒツクセバ、常ノゴトク正シキ列ヲナシテ、シヅ／＼ト引上グ。

〔新字〕群 順 正 最 養 奪 比 常

區分

- 第一時 第一・二節(自百〇三頁六行)を授く。
- 第二時 第三・四節(自百〇四頁八行)を授く。
- 第三時 練習應用。

教具

挿畫を擴大した掛圖。鯛の標本又は實物等。

教法

(甲) 教授上の注意

- 一、鯛は我等の食膳に上る魚類中、最も高等なものとして珍重されて居る魚である。かうした魚につき、之が習性及び生活の状態につき知らしめることは必要でもあるし、また感興を惹くこともある。
- 二、鯛の形態・習性・効用等について大體次に記する範圍に於て授ける。
形態——體形は橢圓形。體色は鮮麗な紅色。上品な魚。
習性——教科書に記する外に、
近海に棲む性あること。小魚・貝類・小蝦・章魚・烏賊の幼きものを食すること。

效用——鯛は生で、煮て、又鹽藏として、また乾鯛として食すること。嘉禮の席に缺くことの出来ない魚であること……等。
産地——本邦の各地に産する。

但し主點は教科書の内容にあることは言ふ迄もない。

- 三、文字・語句等については次に記する所を参照し、平易に説き、確實に知らしめる。

(一) 漢字

「群」——形聲文字である。ムラガリ集まるの義である。羊は柔順で群をなすから羊をかく。君は音符である。漢音は「クン」、吳音は「グン」で、訓は「ムレ」である。

「順」——會意形聲文字である。説文に理也從頁從川、川亦聲と註してある。人面の文理をいふ。故に頁をかく。川は其の文理の相連る義を示す。轉じて逆はずに従ふ義となる。漢音は「シユン」、吳音は「ジュン」で、訓は「シタガフ」等である。

「最」——會意文字で、日と取との合字である。本義は犯し取る義で、日がそれを示す。後に撮を以て取る義とし、最是聚む・總ぶ・極點・第一・モットモ等の義となす。音は「サイ」で、訓は「モットモ」である。

「養」——會意形聲文字で、食物を與へ養ふ義である。羊と食とを合せて其の義を示す。轉じて

教養・養育等の義とする。羊は又音符である。音は「ヤウ」で、訓は「ヤシナフ」である。

「奪」——會意文字で、奪と寸との合字である。奪は鳥が兩翼を張つてはばたきする義、寸は手の義である。此の二者を合して、手に持つ鳥がはばたきをして手から飛び去る義を示すのである。之からウバフの義が生じたのである。慣習音は「ダツ」で、訓は「ウバフ」である。

「比」——會意文字である。二人ならぶを从、从を左右反對にむけるを比とする。二者共にならぶ義であるが、从は正義を意味し、比は阿媚追従して親密なるを意味する。轉じて比較・比隣等の義ともする。音は「ヒ」で、訓は「ナラフ」・「クラブ」等である。

「常」——形聲文字で、裳と同義である。故に巾をかく、尙は音符である。ツネ、ヒサシ等の義とする。更に人倫の義、人生不變の義に用ひる。漢音は「シヤウ」で、吳音は「ジャウ」で、訓は「ツネ」等である。

(二) 語句

「美シキ魚」——鮮麗なる紅色にして金色を帯び所々に淡綠色の小斑點がある。

「手答」——物をうち、突き、又は引いたときに、我が手に、ひびく感覺をいふ。

「タヒノ群ヲナシテオヨグラ見ルニ」——鯛は其の性群棲を好み、常に深さ百尺乃至五百尺の中层に游泳する。

「大小ノ順ニヨリ前後ニ正シキ列ヲナシテ進ム」——鯛が游泳するときには、大なるものが一番先頭に立ち、それから順次小なるものに及ぶ。本當に立派にまた美しく見える。また一番小なるものが一番後からついて行く姿は本當にかはゆい感じがする。

「ツカミノイワシヲナゲコメバ」——鯛は常に小魚・貝類・小蝦・小章魚等を食するが、鯛を殊に好んで食べる。

「比ニアラス」——くらべやうもないの意。

四、本文は主として鯛の習性について記述した叙事的説明文である。

數千の大鯛小鯛が大小の順によつて前後に正しき列をなして悠々と進む所。

一番小なるものが一番後から従つて行く所。

一つかみの鯛をなげこむと、幾千の鯛が一時に集り來つて、大小入亂れて奪ひ合ふ有様。

投げ込んだ鯛を悉く食ひ盡したときは、また常の如く正しき列をなして、しづくと引上げる所。

は立派でもあるし、かはゆくもあるし、目覺ましくもあるし、また堂々たるべきものでもある。かうした點は十分感味させる。また記述即ち文形の整然たる所にもよく注意させる。

五、本文は文語體であるから、之を口語に直す力も十分培養するやう注意する。

六、本課は話方の材料として甚だ適當である。故に形態・習性・効用等につき知つた所を話さしめて、話術の練習を行ふがよい。

第一時

▽第一・二節を授く。

- 一、鯛の標本・掛圖等を示し、之が形態・習性及び効用等につき彼等の知る所を問く。
- 二、目的を告げ、各自をして自由に一讀させる。
- 三、彼等の質疑に答へ、また主要の語句等につき問答する。
- 四、讀み方を檢閲し、自由に二・三回讀ませる。
- 五、内容につき問答する。

- 1、鯛の形態につき——主として體色につき。
- 2、習性につき——群棲を好むこと及び群を爲して游泳するときの有様。

六、誦讀の練習。

個人的に。また自由に。

七、漢字書取。

群ヲナシテオヨグ 大小ノ順ニヨツテナラフ 最モ小ナルモノ 最モ大ナルモノ

第二時

(第一時に準ずる)

第三時

▽練習應用。

- 一、一名をして全文を讀ませる。
- 二、疑問に答へ、また主要の語句等につき問答する。
- 三、内容の要點につききく。全體をして自由に一・二回讀ませる。
- 四、練習應用。

(一)漢字の書取

美シキ魚 手答 タヒノ群 大小ノ順 前後 最モ小ナルモノ 海岸 魚ヲ養フ 食ヲ奪ヒ合フ
ヒノフチアラソフ比ニアラズ カホ色常ノゴトシ 列ナツクル

(二)語句の適用(短文作爲)

手答 正シキ列チナシテ 奪ヒ合フ 目ザマシキ 比ニアラズ 常ノ如ク シツ／＼ト

(三)次の文語を口語で書きあらはさせる。

美シキ魚ニシテ 手答アリ マコトニカハユシ タヒチ養ヒオク所アリ イワシチナゲコメバ コヒノフチアラソフ比ニアラズ イワシチクヒツクヒバ 常ノ如ク正シキ列チナシテ

(四) 次の點線をうづめてまよつた文章にさせる。

- (1) タヒハ美シキ魚ニシテ……モ強シ。五六寸ノ小ダヒチツリ上ケルニ……。
- (2) タヒノ群チナシテオヨグチ見ルニ……。ソノ時最モ小ナルモノノ最モ後ヨリシタガヒ行クハ……。
- (3) 幾千ノタヒ一時ニ集リ來リ、大小入りミダレテ奪ヒ合フ様ノ目ザマシサハ……。
- (4) イラシチ言ヒツクセハ……ト引上ケ。

五、話方の修練を行ふ。

(注意) 若し時間が不足する場合には(二)と(三)とは家庭課題とする。

備考

鯛

鯛は、その色澤の美なると、味の佳良なることにより、古來から甚だ貴重せられ、魚類中の王と稱せられてゐる。故に、冠婚等の嘉禮には、缺くべからざるものとして居る。

形態——體形は、楕圓形で、頭部は、比較的大で、側扁である。全身は鮮麗なる紅色を呈し、金色を帯び、所々に、淡綠色の小斑點がある。鱗は多種を具へ、數本の強剛なる硬棘がある。眼は大きく、口は小さく、圓錐形をなせる鋭き齒を有し、動物を捕食するに適する。十分に成長すれば二尺内外に達する。

習性——近海に棲む性があつて、深さ百尺乃至五百尺の中層を游泳し、小魚・貝類・小蝦・蠕蟲類、及び章魚・烏賊の幼きものを食とする。冬期はや、沖合に棲み、春に至れば、次第に沿岸に近づき、夏期には、深さ五十尺内外の淺所に来て産卵する。この時期には體色は一層麗麗である。而して秋に至れば、幼魚は老魚と共に、沖合に向つて去る。本邦各地の近海に産すれど

も、北方の海中にはや、少なしとする。

効用——肉の味が淡泊美味なるのみでなく、その色澤の麗麗なこと、體形の高佳なること等によつて最も賞用せられる。ことに嘉禮の席には缺くべからざる料理とせられてゐる。生で食する外、鹽藏とし、乾鯛となし、鯛味噌、鯛田麩となすなど、種々に應用せられて、賞味せられる。

第三十三 笑ヒ草

要旨

形式上では新文字の讀み方、書き方、難語句の意義、語法等につき知らしめて本文の讀解に習熟させ、内容上では本文に流れて居る可笑味を味はさせるを以て要旨とする。

教材

第三十三 笑ヒ草

(一)

或男ガ友ダチニ向ツテ、

「鹿ノヤウニ足ノ早イ獸ハ、大テイ蹄ガニツニワレテキルヤウダ。」

ト言ヒマシタ。友ダチハ

「ソナナ事ハアルマイ、馬ハ蹄ガニツダケレドモ、早ク走ルテハナイカ。」

第三十三 笑ヒ草

前ノ男、

「馬ハ一ツテサヘアレダケ早イカラ、二ツアツタラ、早クテ仕方ガアルマイ、」

友ダチハ又

「ソナナラ牛ハドウダ。」

前ノ男イヨ／＼負ケヌ氣ニナツテ、

「牛ハ蹄ガ割レテキテサヘアノ通りオソイ。一ツナラトテモ動ケマイ。」

(二)

子供ガ池デ竹サチ洗ツテキタ。イツマデモイツマデモ手元ノ所バカリ洗ツテキルノデ、通りカ、ツタ人が

「ナセソコバカリ洗ツテキルノデス。モット先ノ方キ洗ツタラヨイデセウ。」

ト言フト、子供ハ

「私モサウ思ヒマスガ、アソコマデハ手ガ届キマセン。」

ト答ヘタ。

〔新字〕 蹄 割 池 届

區分

第一時 (一)の文を授く。

第二時 (二)の文を授く。

教法

(甲)教授上の注意

- 一、本課は可笑的材料である。一種の文學的戯作である。讀者は之により開口一番大笑さへしたなら、それでも本課の要求は立派に達せられたのである。
- 二、此の種の如き可笑的材料にあつては、最後の一句に全文の生命がかゝつてゐる。即ち開口一番大笑する所は文の終りの一節にある。従つて取扱ひに於ても最後の二節に深き注意を拂はなければならぬ。
- 三、文字・語句等については次に記する所を参照し、平易に説き、明確に知らしめる。

(一)漢字

「蹄」——形聲文字である。獸の足の義、故に足扁をかく。帝は音符である。漢音は「テイ」、吳音は「ダイ」で、訓は「ヒヅメ」である。

「割」——形聲文字である。物を剥ぎ裂く義である。故に刀をかく。害は音符である。漢音は「カツ」、吳音は「カチ」で、訓は「ワル」「サク」等である。

「池」——形聲文字で、沱に同じ、もとは支那の揚子江の一支流の名であつた。它是音符であるが、它と也とは同字であるから池とかくに至つた。後轉じてイケの義となる。漢音は「チ」、吳音は「ヂ」で、訓は「イケ」である。

「厩」——形聲文學で、尸と出との合字である。行くに不便なることの義で、尸が其の義を示して居る。出は音符である。音は「カイ」で、訓は「トドク」である。

(二) 語句

「鹿」——偶蹄類中麋鹿科に屬する獸である。四肢細長で走ること甚だ速かである。毛色は夏季は淡褐色で斑點があるが、冬季は一般に灰褐色となる。性質温順で、雄には有枝の角がある。「アルマイ」——「アル」と比較して職能の異同を明かにする。

「馬」——奇蹄類に屬する動物である。力あつて、足速く、有用な家畜の一である。

「一ツテサへ」——「サへ」の職能及用法を知らしめる。

「牛」——偶蹄類中反芻科に屬する獸である。足細くして短い。歩行も遅い。性質遅緩であるけれども、力強く、馬と同じく有用なる家畜の一である。

「イヨく負け又氣ニナツテ」——負けない上に尙負けない氣になつての意。

四、本文の(一)に於て

「鹿ノヤウニ足ノ早イ獸ハ大タイ蹄ガ二ツニワレテキルヤウダ」

といふのであるから、偶蹄の獸類は一般に走ることが速かであるといふ断定になるのである。しかし偶蹄類にしても牛は性も遅鈍で、歩むことも頗る遅緩である。それからまた馬は奇蹄類

で蹄は割れてゐないけれども走ることが頗る迅速である。故に此の男の言ふ断定が不動のものでなく、前二者の實證によつて破れる譯である。即ち

「ソナナ事ハアルマイ。馬ハ蹄ガ一ツダケレドモ、早く走ルデハナイカ」

との他の男の一言によつて、その主張、その断定が見事に破れた譯である。本來なら茲に兜をぬいで降参すべき所だが、負けぬ氣の男であるから、

「馬ハ一ツテサヘアレダケ早イカラ、一ツアツタラ、早くテ仕方ガアルマイ」

と、奇抜な答によつて、うまく切りぬけたのである。第三者即ち傍らに聞いてゐた連中は其の奇抜な、頓智の利いた言に對して、どつと笑の出る所である。しかし相手の男は之には服従しない。ますく肉薄して、

「ソナナラ牛ハドウダ」

といつて、同じ偶蹄の仲間を實證に促へ來つて、更に一本突き込んだのである。普通ならこれできやふんと參る所であるが、頓智の利いた男であるから、即座に

「牛ハ蹄ガ割レテキテサヘアノ通リオソイ、一ツナラトモ動ケマイ」

と、奇抜なしかも矛盾のある答によつて甘く切り抜いたのである。こゝがまたどつと笑の湧くべき所である。すべてかうした作爲即ち材料にあつては、正しい道理で進んでいつては面白く

ない。矛盾のある所が却つて面白いのである。即ち矛盾が笑を産む源泉なのである。故に嚴密に論理上から詮議だてしないのが、此の種の文を取扱ふ上に於ける一つの要件である。(二)の文に於て笑の起る所は、

「私モサウ思ヒマスガ、アソコマデハ手が届キマセン」

といつた最後の一節にある、今(一)と(二)とを比べて見ると、

(一)に於ては笑が二度起る。即ち

「馬ハ一ツデサヘアレダケ早イカラ、ニツアツタラ、早クテ仕方ガアルマイ」

「牛ハ蹄ガ割レテキテサヘアノ通りオソイ。一ツナラトモ動ケマイ」

の所である。(二)に於ては最後の二節即ち

「私モサウ思ヒマスガ、アソコマデハ手が届キマセン」

の所である。

五、本文章は言ふ迄もなく讀んで笑ふといふことが其の主眼であるけれども、之に關聯して反省する所もあつてよい。例へば(二)に於て、かうして智慧の廻はらないことは自分に於ても、ありはしないだらうかと、自分で自分の胸の内に反省するのである。

(乙)教授の實際

第一時

▽(一)の文を授く

一、各自をして自由に一讀させる。

二、彼等の質義に應答し、また教師から主要の語句・語法等につき問答する。

三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませる。

四、内容の吟味を行ふ。

(1)先づ或男が鹿について言つたことについて、

(イ)その意味につき。(ロ)適否につき考案。

(2)次にその言に對し友だちの言つたことについて。

(イ)その意味。(ロ)適否に對する考案。

(3)次に友だちの言に對し、また前の男の言つたことにつき。

(イ)その意味につき。(ロ)適否につき考案。

(4)次にその男に對し、また友だちの言つたことにつき。

(イ)その意味。(ロ)それが適否の考案。

(5)可笑味の宿在してゐる所につき。

五、誦讀練習。(個人的に、また自由に)

六、漢字の書取。

七、語句の適用(二つ一つを使つて短文作爲)

……………ノヤウダ。……………ハアルマイ。
……………サヘ……………カラ……………
イヨク

第二時

▽(二)を授く

(第一時に準ずる)

第三十四 かぐやひめ

要旨

形式上では新文字の読み方・書き方、難語句の意義、語法等について授けて、本文の讀解に習熟させる。内容上では完全性の憧憬から生んだ此の物語を讀ませせて、純雅な神祕的な文學的趣味に活かしめるを以て要旨とする。

教材

第三十四 かぐやひめ

昔或所に竹取のおきなといふおぢいさんが住んでゐました。毎日野や山へ行つて、竹を切つて来て、いろ／＼な細工物をこしらへて暮しを立ててゐました。或日のこと、根本が大そう光つてゐる竹のあるのを見附けて、それを割つて見ますと中に三寸ばかりの小さな女の子がゐました。おぢいさんは大そう喜んで、手のひらへせて歸つておばあさんにそだてさせました。始のうちは小さいので、かこの中へ入れて置きましたが、すん／＼大きくなつて、三月程たつと、りつばな娘の子になりました。この子を見附けてからは、おぢいさんが切る竹からはいつもお金が出て来るのでおぢいさんはいつの間にかお金持になりました。おぢいさんはこの子にかぐやひめといふ名を附けました。世間の人々はこの事を聞いて、方々から「自分がむこにならなう。私のよめに下さい。」と申しこみましたが、かぐやひめはどうしてもしようしません。おぢいさんも「自分の生みの子でないから、自分の思ふやうにはなりません。」と云つてゐました。後には國の王様から、おきさきにとのおことばもありましたが、かぐやひめはそれもおことわりしました。かうして二十年もたちました。或年の春の頃から、かぐやひめは月の明るい晩になると、月をながめては何か考へてゐるやうでしたが、八月の十五夜近くなつては、聲を立てて泣いてばかりゐます。おぢいさんやおばあさんがなぜ泣くのかとわけを聞きますと、かぐやひめは

「私は元は月の都の人です。しばらくこの世界に住むことになつたので、長い間お世話になりましたが、この十五夜には月の世界からむかへに参ります。それで皆さんにお別れるのがつらいから泣いて居ります。」
と云ひました。おぢいさんは、おどろいて、
「迎へに来ては渡すものか。」
と云つてゐましたが、十五夜の晩の夜中になると、家のぐるりはお月さまが十程も出たやうに明るくなつて、天人が雲に乗つて下りて来ました。かぐやひめは今仕方なく、泣いてゐるおぢいさん・おばあさんに向つて、
「今お別れ申す事はまことに悲しうございますが、仕方がありません、月夜の晩には、どうか私の事を思ひ出して下さい。私

もお二方の御恩は決して忘れません。」

と言つて、天人のよういして来た車に乗つて、空へ上つて行つてしまひました。

〔新字〕 住 綱 本 置 娘 世 泣 都 界 話 別 迎 悲 恩 忘

區分

- 第一時 全文の通讀。
- 第二時 第一節(自百〇九頁四行)を授く。
- 第三時 第二・三節(自百十一頁一行)を授く。
- 第四時 第四節(自百十三頁三行)を授く。
- 第五時 同 節(自百十五頁四行)を授く。
- 第六時 全文の復習及び應用。

教具

挿繪を擴大した掛圖

教法

(甲)教授上の注意

- 一、本教材は竹取物語からとつたものである。竹取物語は「竹取翁物語」とも、また「かぐや姫の物語」ともいつて居る。我が國最古の小説である。作者は詳かでない。中には源順の作だといふ人もあるが信じ難い。平安朝の初期に出来たもので、田中大秀は延喜以前のものだと言つて居る。容色天下に比儔なき赫耶姫といふのを主人公とし、朝指貴公子が此の一婦人のために身を忘れ、心を蕩かせる様を滑稽の中に寫し出したものである。一篇の趣向は寶樓閣經・者婆經・搜神記・漢武内傳等の梵漢の書中から取つたものだといふ。
- 二、本課は宗教的の句もなく、また性に對する濃厚な所もなく、誠に純正に、高雅に、神秘的に出来てゐる物語である。純雅な氣分に觸れさせ、神秘的境地に憧憬させることが本課の中心生命である。
- 三、文字、語句等については、次に記する所に基き、平易に説き、明確に知らしめる。

(一)漢字

「住」形聲文字で、とどまる義である。後更に轉じてスマヒの義となる。主は音符である。漢音は「チュ」、吳音は「ヂユ」で慣習音は「ヂユウ」で、訓は「スム」「トドマル」等である。

「置」形聲文字である、本義は赦すといふ義である。正直であればたとひ捕へられるとも赦免される。故に直と囧とを合せて其の義を示す。直はまた音符である。轉じて廣く「オク」義に

用ひる。

「娘」——此の字は古くには見えない。漢音は「ヂャウ」で、吳音は「ナウ」、慣習音は「ラウ」で、訓は「ムスメ」である。

「泣」——形聲文字である。聲なく涕を出して泣くことである。立は音符である。音は「キフ」で、訓は「ナク」である。

「界」——會意形聲文字で、田と介との合字である。田と田との境のことである。故に田と介（二者の間にはさまり立つ）を合して作つた。介はまた音符である。後更に土扁を加へて堺とした。音は「カイ」で、訓は「サカヒ」である。

「別」——會意文字である。刀とリの合字である。本義は刀を以て骨と肉とを解剖する義である。故に刀と刀とを合して作つたのである。刀は刀と同字で、肉と骨とを別々に分つ意である。漢音は「ベツ」、吳音は「ベチ」で、訓は「ワカツ」等である。

「迎」——形聲文字である。來るものをむかふる義である。漢音は「ゲイ」、吳音は「ギャウ」で、訓は「ムカフ」である。

「悲」——形聲文字である。いたみかなしむ義である。非は音符である。音は「ヒ」で、訓は「カナシム」である。

「恩」——形聲文字で、めぐむの義、故に心をかく。因は音符である。音は「オン」で、訓は「メグム」である。

「忘」——形聲文字で、心にしるさずしてわすれること、故に心をかく。亡は音符である。漢音は「バウ」、吳音は「マウ」で、訓は「ワスル」である。

(二) 二語句

「竹取のおきな」——毎日山野に行つて、竹を切つて來て、それでいろ／＼な細工物をこしらへて暮を立てゝゐたからかく呼んだのである。竹取物語には其の名讃岐造磨とある。「おきな」は男の年寄をいふ。

「細工物」——こゝでは竹をもつて、箸をつくるとか、籠をつくるとか、花たてをつくるとかをいふ。

「三月程たつと、りつばな娘の子になりました」——竹取物語には、

三月ばかりになる程に、よきほどなる人になりぬれば、髪上など沙汰して髪上げさせ装着す。張の内よりも出さず、いつきかしづき養ふほどに、この兒のかたち清らなること世になく、家の内は暗きところなく光満ちたり。翁心のあしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事も止みぬ。腹たゝしきことも慰みけり。

とある。

「この子にかぐやひめといふ名を附けました」——竹取物語に

この子大きくなりぬれば、名をば三室戸齊部秋田を呼びつけさす。秋田なよ竹のかぐや姫とつけつ云々。

とある。

「自分がむこにならう、私のよめに下さい……」——竹取物語には、

その中に猶いひけるは、色好といはるゝかぎり五人、思ひ止む時なく夜晝來けり。その名一人は石作皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿都御主人、一人は大納言大伴御行、一人は中納言石上麻呂たゞこの人々なりけり。世の中に多かる人々だに、少しもかたちよしと聞きては見まほしうする人々なりければ、かぐや姫を見まほしうて、物も食はず、思ひつゝかの家に行てたすみなりき。けれどもかひあるべくもあらず云々。

とある。あとで姫は強ひて難題を前の五人に設け、此の人々は、或者はにせものをもたらせて來て事露はれ、或者は寶を得んとして命を失ひ、或者は難儀をしたけれども寶を得ず、遂に思ひ止つたと言ふ風にかいてある。勿論かうした濃厚さを兒童に語るのではないが、茲はたゞ教師の参考にも記したのである。

「後には國の王様から、おきさきにとのおことはもありましたが、かぐやひめはそれもおことわりしました」——竹取物語には「時の御門がかぐや姫の容姿のすぐれたるを聞き給うて、内待中臣のふさ子に命じて見に遣はし給ふ。ふさ子竹取翁の家に至り、姫に遇はうとすれども、姫は拒絶してどうしても遇はない。ふさ子止むなく歸つて其の次第を帝に奏上した。帝は乃ち竹取翁を呼んで姫を奉るべき旨申渡された。翁歸つて姫に其の次第を告げてすゝめるけれども、どうしても承知しない。若し強ひてとあれば死せんのみだといつて應じない、翁は止むなく此の旨を奏上した。しかし帝はどうしても思ひ切ることが出来ない。突然翁の附近に狩をして、かぐや姫の家に入り給うた。見るにそこに光り輝いた清らかな一人の姫が居る。帝はこれだらうと思つて袂を捕へ、無理に伴ひ歸らうとしたに、姫の姿直ちに消えて無くなつた。帝は之はただ人では無い、伴ひ歸らぬから、元の姿になれよと仰せられたら、姫は元の姿になつてそこに現はれた云々」といふ意味にかいてある。

「八月の十五夜近くなつては、聲を立てて泣いてばかりあります」——竹取物語には

「八月十五日ばかりの月にいで居て、かぐや姫といたく泣き給ふ。人めも今はつゝみ給はず泣き給ふ。」とある。

「月の都の人」——月に對する傳説は我が國は勿論印度、エジプト・伊太利・獨逸等の諸國にもある。併し本話に關係あるものは印度に於ける月の傳説である。左に記さう。

印度では月の中に兎が居るといつて居る。それは昔菩薩方が修行してゐる時に、天帝が兎の心を試みようと思つて、食ふべき肉をもつて來いと命ぜられた。兎は早速自分の體を火の中に投じ、自ら焼けて天帝の食に捧げた。天帝は此の兎の行を嘉して、その身を亡ぼしてまでも他に食を供しようとする善行を一切の衆生にも仰き見させようとして、焼けた兎を火の中から取り出して、月の世界に送つた。それで月の中に兎が居るのだといふ。

また月には宮殿があつて月の天子が諸の天女と共にこゝに住んで居る。天子は五百歳の命を保ち、子孫相承けて月の世界を治めて居るといふ。

「この世界に住むことになつた」——この世界は下界即ち人間界をいふ。「すむことになつた」の理由についてはこゝではわからない。竹取物語には

昔の契なりけるによりてなん、この世界にはまうで來りける。
とある。しかし後章でわかることになつて居る。

「迎へに來ても渡すものか」——竹取物語には

翁、こはなでふことをの給ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きおはせし

を、我丈^{たは}ち竝ぶまで養ひ奉りたる我子を、何人が迎へきこえん。まさに許さんやといひて、
我こそ死なめとて、泣きのゝしること堪へがたげなり。云々
とある。

「十五夜の晩の夜中になると家のぐるりはお月さまが、十程も出たやうに明るくなつて天人が雲に乗つて下りて來ました」——竹取物語に

かゝる程に宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝のあかるさにも過ぎて光りたり。
望月のあかるさを十合せたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乗りておりきて、地より五尺ばかりあがりたるほどに立ち連ねたり。これを見て内外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、相戦はん心地もなかりけり。辛うじて思ひ起して
弓矢をとりたてんとすれども、手に力もなくなりて痿え屈りたる中に、心さかしきものねんじて射んとすれども、外さまへいきければ、あれも戦はで、心ちたゞしれに守りあり。立てる人ども装束の清らなること物にも似ず。飛車一つ具したり。羅蓋^{らがい}さしたり。その中に王とおぼしき人、家に造磨^{みやつこ}まるでこといふに、猛く思ひつる造磨も、物に酔ひたる心地して、うちぶしに伏せり。いはく汝をなき人、聊かなる功德を翁つくりけるによりて、汝が助にとて片時そのほどとて降しゝを、そこの年頃そこの金賜ひて、身をかへたるが如くなり

にたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許にしばしおはしつるなり。罪のかぎりはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎くあたはぬことなり。はや返し参れといふ。翁答へて申す。かぐや姫を養ひ参ること二十年あまりになりぬ。片時との給ふに怪しくなり侍りぬ。また他所にかぐや姫と申す人ぞおはしますらんといふ。こゝにおはするかぐや姫は重き病をし給へばえ出でおはしますまでと申せば、その返事はなくて、屋の上へ飛車をよせて、いざかぐや姫、穢き所はいかで久しくおはせんといふ。立て籠めたる戸即ちただあきにあきぬ。格子どもも人はなくして開きぬ云々。

とある。右の中で罪の子として下界に下した云々は若し子供がどんな譯で下界に降つたのかと問ふたら答へることにし、態、かうした譯だと語ることには要らない。語らぬ所は却つて神秘的でよいと考へる。

「天人のよういして来た車に乗つて、空へ上つて行つてしまひました」——帝は中將高野の大國といふ人をして六衛府の武士二千人を率させて竹取の家に遣はして、一には姫を護り、一には月の郡の人だちを捕させた。家に至つて、築地に千人、屋の上に千人、また家の人々も出してすき間なく弓矢を手にして守らせた。母屋の内では女どもをして守らせ、嬭は塗籠の内にかぐや姫をいだいてをり、翁も塗籠の戸をおさへて居たのである。しかしこれ等は何の効果もなか

つたのである。姫は明月の光をふんで遂に月宮に歸つたのである。因に本課を取扱ふには、之をなす前教師は是非竹取物語を一讀することを怠つてはならない。

四、本文章は四節から出来て居る。即ち

第一節——かぐや姫の出現。

第二節——嬭の端麗と翁の家の福徳。

第三節——世の若人及び國王からの求婚。

第四節——嬭の天上への歸落と下界の悲劇。

である。そこで第一節に於ては

- 1、竹取の翁は竹細工を營んで細々と其の日の暮を立ててゐたこと。
- 2、しかし翁は温順な且機心の深い人であつたこと。
- 3、竹の根もとから光り輝く小さき女の子を得たこと。
- 4、大そう喜んで家に持ち歸り嬭と共に養育せしこと。

の點をよく知らしめる。特に竹の根本が光り、其の中から光る人の子の出現したときの翁の不思議と喜悅との境地を十分味はさせる。第二節に於ては、

- 1、小さき子がだんく成人して、こゝに容姿端麗な姫様となり、體から常に光が出てゐたこと。
 - 2、其の後翁が竹を切ると一節々から黄金が出て、いつの間にか大金持となり、幸福に暮せしこと。
- の點をよく味させる。第三節に於ては

- 1、姫は常に一室に閉ぢ籠つて外に出てざりしこと。
- 2、世の人々は姫の端麗な容姿を見んとて、晝夜家の周邊を離れざりしこと。
- 3、若き貴公子連から切りに求婚を申込まれしも姫は拒絶せしこと。
- 4、國王からの切望もありしも拒絶して應ぜざりしこと。

の點を、いかに端麗であつたか、いかに高雅であつたかを想起させんことを中心として味はさせる。第四節に於ては、

- 1、姫がもう爺の家に育つてから二十年の長き月日を経たこと。
- 2、姫が月の明るい晩になると、庭にいて月を眺めては何か考へてゐたこと。殊に八月の望月近くなつてから聲を立て、泣き悲しんだこと。
- 3、爺と姫とが訝つて其の譯を問ひしこと。姫が遂に悲しむ譯を打明けしこと。
- 4、爺と姫との悲しみ、國王からの醫護につき。
- 5、八月十五日の晩に月の世界から天人が飛車を以て迎へに來たこと。
- 6、下界の悲劇と姫は遂に天上の人になつて行きしこと。

の點につき十分感味させる。殊に本節は本課の中心であるから、姫の惜別、爺の悲哀、天人の降下、警固の武士共の萎え、姫の昇天については殊に力を用ひて、その哀愁な純雅な神祕な境地に感激させ、浸潤させ、憧憬させる。

五、本課を取扱ふ際、中には理知に長けた兒は、天上に世界ありやとか、實際に天人なるものゝ

るかとか、これは本當の事實であるかと言ふやうに質問するかも知れない。私共が尋二の兒童に羽衣を授けたとき、かうした事實があつた。故にかうした疑問に對してはどう答へるかは考慮を要する。私共は羽衣のときには

「これは人の心からつくつた眞實である」

といつてきかせた、子供はそれで領いた。併し分つて領いたのか、分らずに領いたのか、その點は分らない。兎に角かうした疑問は今回直ちに之を解かなくてもよい。彼等が成長の後に自づと解ける疑問である。故にこゝで明瞭に解決せんとあせらなくてもよい。

六、本課は本文中に於ける一大長篇である。かうした長篇は如何に取扱ふべきかとはお互が口にする問題である。その内でも教材の區分については、随分やかましい。殊に本篇の如き文學的教材にあつては、生命の連続といふ所からとりわけ八釜敷い。私共は教材の性質上から、また分量の可能の上から先づ第一時には全文をざつと讀ませて、全體の氣分にふれさせ、それから部分的に區分して十分感味させる考である。

(乙) 教授の實際

第一時

▽全文の通讀

第三十四 かぐやひめ

一、先づ各自をして、何をかいてあるか、それを知らうといふ考で、各自に一讀させる。次に

二、讀んで知つた所を

- 1、おぢいさんの名は。
- 2、竹を切つたら中から何がでましたか。
- 3、その女の子はみつきほど後にどうなりましたか。
- 4、おきなの家はどうしてお金持になつたか。
- 5、女の子に何といふ名をつけましたか。
- 6、二十年ほどたつてから、おぐや姫は月を見て大そう悲みましたが、それはどうした譯なのでせうか。
- 7、おきなは何といひましたか。
- 8、おきはなはどういひましたか。
- 9、八月の十五日におぐや姫はどうしましたか。

といふやうな問の下に話させる。次に

三、教師が一度よんで聞かせる。さうして尙時間に餘りがあれば各自をして自由にいくとも讀ませる。

第二時

▽第一節を授く

一、目的を告げ、各自をして自由に一讀させる。

二、彼等の質疑に應答し、また教師から主要の語句等につき發問する。

三、一兒を指名して讀ましめ、誤る所を正し、次に各自をして自由に二三回讀ませる。

四、内容の吟味を行ふ。

(教授上の注意「四」を参照して)

五、誦讀の練習。

個人的にまた自由に讀ませせて讀解に習熟させる。

六、書 取

昔 或所 竹取のおきな 住む 毎日 野山 細工物 暮を立てる 根本 見附 竹を割る
小さな女の子 喜ぶ いへに歸る

[注意] 第二・三・四・五時は第一時に準じて授ける。而して内容の吟味は教授上の注意「四」をよく参照して行ふ。

第三時

▽全文の復習及び應用

一、各節毎に指名して讀ましめ、そこに於ける質疑に應答する。

二、内容につき各自の味つたところを話さしめる。また教師の味つたところをも語る。

三、練習應用。

(一)漢字の適用。(口唱書取)

家に住む。細字。本を置く。一人の娘。人間。子供が泣く。都の人。世界。父に別れる。母を迎へに行く。悲しみ泣く。親の恩を忘れるな……等。

(二)語句の適用。(短文作爲)

暮を立てて すんく 方々から おことわり 聲を立てて泣く ……のがつらいから 決して……等

(三)次の點線をうづめて全き文章にさせる。

- (1) 根本が大そう光つてゐる竹がある。それを………小さな女の子がぬました。
- (2) おぢいさんはこの子に………といふ名をつけました。
- (3) 私は元は………の人です。住むことになつたのです。
- (4) この十五夜には………参ります。
- (5) 十五夜の晩の夜中になると、家のぐるりは………やうに明るなつて、………下りて來ました。
- (6) かぐや姫は天人のよういして來た車にのつて………。

四、話方の修練。

各自をして其の知つたころを話さしめて話術の修練を行ふ。

第三十五 數へうた

要旨

形式上では、新文字の讀み方、書き方、難語句の意義、語法等につき知らしめて本文の讀解に習熟させる。内容上では數へ歌を通して、忠孝、友愛、信義、誠實、修學、仁愛、攝生、品位並びに祖先尊崇等の諸徳を涵養する。

教材

第三十五 數へうた

- 一つとや、
人々忠義を第一に
あふげや高き君の恩、國の恩。
- 二つとや、
二人の親御を大切に、
思へや、深き父の愛、母の愛。
- 三つとや、
みきは一つの枝と枝、
仲よく暮せよ、兄弟・姉妹。

第三十五 數へうた

四つとや、

善き事たがひにすいめ合ひ、

悪しきをいさめよ、友と友、人と人。

五つとや、

いつはり言はぬが小供等の

學びの初ぞ、つゝしめよ、いましめよ。

六つとや、

昔を考へ今を知り、

學びの光を身にそへよ、身に附けよ。

七つとや、

なんぎをする人見る時は、

力の限りいたはれよ、あはれめよ。

八つとや、

病は口より入るといふ。

飲物・食物氣を附けよ、心せよ。

九つとや、

心はかならず高く持て。

たとひ身分は低くとも、輕くとも。

十とや、

遠き祖先のをしへをも、

守りてつくせ、家のため、國のため。

〔新字〕 忠義 愛 善 惡 等 學 身 限 病 低 祖

區分

第一時 自一至五歌を授く。

第二時 自六至十歌を授く。

第三時 全文の復習。

教法

(甲) 教授上の注意

一、本課は所謂數へ歌である。數へ歌の内容には戀愛的のもの、勸善的のもの等色々あるが、本課は勿論勸善的のものである。従つて之が内容の體現を以て中心生命とする。

二、文字、語句については、次に記する所に基き、平易に授け、明確に知らしめる。

(一) 漢字

〔忠〕——會意形聲文字である。真心を盡す義である。中(中心の情)と心とを合せて其の義を示す。後世多く君に事へるの道に言ふ。漢音は「チュウ」、吳音は「チュ」で、訓は「マゴコロ」であ

る。

「義」——會意形聲文字である。我が威儀を正しく立派にする義である。故に羊(善美の意)と我とを合して其の義を示す。轉じて制裁の宜しきに合すること。道理に合すること。人の履行すべき正しき道等の意となすに至つた。音は「ギ」訓は「ヨシ」「タマシ」等である。

「愛」——形聲文字で、^{アイ}恣と恵むと久(行く)との合字である。後變じて愛となり、メグム・アハレム・イツクシム等の義となす。音は「アイ」で、訓は「イツクシム」・「メヅ」等である。

「善」——會意文字である。仁人君子の言で正理に適ひ法則に戻らざる義である。後轉じて一般にヨキ義に用ひるに至つた。羊は吉祥の祥の義で、之に美しき正しき義がある。漢音は「セン」、吳音は「ゼン」で、訓は「ヨシ」である。

「身」——形聲文字である。人の體に象つたものである。轉じて自己の稱即ちミヅカラと訓するに至つた。音は「シン」で、訓は「ミ」・「ミヅカラ」等である。

「限」——形聲文字で、へだつる義である。艮は音符である。漢音は「カン」、吳音は「ゲン」で訓は「カギリ」である。

「低」——會意形聲文字である。もと氐に作りひくきの義であつたが、後に人扁を加へるに至つた。氐はまた音符である。漢音は「テイ」吳音は「タイ」で、訓は「ヒクシ」である。

「祖」——會意形聲文字である。本義は先祖の祖で、其の家の最初の親の義である。之を神として祭る故に示と且(祭りの臺)とを合して作つたのである。且はまた音符である。音は「ソ」で、訓は「ヂヂ」・「オホグ」・「ハジメ」等である。

(二) 語句

「忠義」——真心を以て君に事へること。唐書に「可爲者惟忠義而已」とある。

「第一に」——「第一にして」・「第一に心得かけて」などの略。副詞であつて「して」「心がけて」などの言葉を限定する。

「あふげや」——「アオゲヤ」と發音する。「敬へや」・「尊べや」といふほどの意である。

「親御」——「御」は人の父母を敬うて言ふ語。

「思へや」——「や」は感動詞である。

「みきは一つの枝と枝」——兄弟は同じ父母から分れ出たのをいふ。千字文の同氣連枝の註に「同愛ニ父母之氣一如樹之有枝相連而生」とある。

「兄弟・姉妹」——「アニオトト・アネイモト」とよませる。

「いさめよ」——友の悪い事に對していけんすること。

「友と友、人と人」——「朋友相互の間」「人々相互の間」といふ意味。

「學びのはじめぞ」——學びの第一歩、又は學びの發端であるの意。
「昔を考へ今を知り」——古今の學問をしての意。「考へ」と、「知り」とは古今を分けて語を
やなしたのである。

「學びの光」——學問によつて得る一身の智徳。即ち人格の光を具體的に形容したのである。人
格の美は智徳の修養によつて、智徳の修養は學問によつて得らる。故にかく言つたのである。
「力の限り」——「我が力の及ぶかぎり」の意。

「病は口より入る」——飲食を慎しめよとの意の諺。該餘叢考に「病從_レ口入、禍從_レ口出、見_ニ莊
綽雞肋篇_ニ謂當時諺語。」とある。

「心せよ」——「注意せよ」に同じ。

「たとひ」——事をかりに設けていふ詞。「よしや」「よしんば」と同じ意味で副詞である。

「遠き祖先」——「祖先」は先祖と同じ。家系の初代の人である。又其の家の現在者以前の人々で、
其の家廟にまつられてある人々をいふ。

「をしへ」——こゝでは祖先の遺された教訓をいふ。

三、本歌は

數へうた

- 一——忠義 (山よりも高い君の恩に感謝し
て、忠道を勤むべき旨を詠む。)
- 二——孝行 (海よりも深い親の恩に感謝し
て、孝道を勤むべき旨を詠む。)
- 三——友愛 (兄弟は一つ親から血を分けて生れたもので
あるから、互に仲善く暮すべき旨を詠む。)
- 四——信義 (朋友相互の間、人々相互の間にあつては、互
に善を勧め、惡を戒めて行くべき旨を詠む。)
- 五——誠實 (偽りを言はぬのが先づ徳に入る門で學びの初歩であ
るから、常に慎み戒め、誠であるべき旨を詠む。)
- 六——修學 (古今の學術を修めて、知能を啓發し徳
器を成就すべき旨を詠む。)
- 七——仁愛 (難儀な人に對しては自分に應じて之
を勞はり之を救ふべき旨を詠む。)
- 八——攝生 (飲食物に注意して常に堅く攝
生の道を守るべき旨を詠む。)
- 九——志操 (めい_レの自分に高下があつても、心
思は常に高尚であるべき旨を詠む。)
- 十——遺訓の顯彰 (遠き祖先の遺訓たるべき忠孝の大道をよく守つて
家のため又國のために常に益すべき旨を詠む。)

の諸徳について歌つたのである。故に一つ一つの中にかうした徳の含まれてゐることを明確に
知らしめ、以て日常言行の規矩たらしめる。

四、本課を取扱ふには先づ第一の歌を教へ、よく其の意義が分つたなら、次に第二の歌を教へる。

以下順次かくの如き方法によつて教授を進めて行く。かくして全部を教へ終つたら兒童をして幾度でも誦讀させ。遂に全文を誦讀し得るに至らしめる。

五、本課は文語體であるから、之を口語に直して其の意義を明かならしめること、また語句の省略倒置等も多くあるから、補充し、又平叙に置きかへて、其の意義を明かならしめることを忘れぬやうにする。

(乙) 教授の實際

第一時

▽一・二・三・四・五の歌を授く

- 一、先づ一の歌につき、各自をして自由に一讀させる。次に
- 二、彼等の質疑に答へ、また教師から主要の語句、語法等につき發問する。
- 三、讀み方を檢閲し、各自を自由に二三回讀ましめる。
- 四、内容につき吟味する。
- 五、誦讀練習。

(注意) 次の二・三・四・五の歌も同様に取扱ふ。

第二時

▽六・七・八・九・十の歌を授く

(第一時に準ずる)

第三時

▽全文の復習及び應用

- 一、歌一つ一つにつき次の如くする。
 - 1、一讀させる。
 - 2、質疑に答へる。
 - 3、内容につき問答する。
- 二、全歌を自由に幾回か練讀させる。(可成そらで讀むことが出来るまでに)
- 三、誦讀。
- 四、語句の練習應用。

(一) 漢字の書取。

忠義	君の恩	親御	父母の愛	兄弟姉妹	善き事	悪しき事	子供等	學を學ぶ	昔を考へ今を知
る	學びの光を身にそへよ	力の限りいたはれよ	病は口より入る	身分の低い人	身分の軽い人	遠き祖先			

(二) 假名遣

あふぐ たがひに いっぱり たとひ をしへ……等。

(三) 次の問に對して答をかゝしめる。

- (1) 忠義とは……………。
- (2) 孝行とは……………。
- (3) 兄弟は……………。
- (4) 友だちは……………。
- (5) いっぱりは言はぬことが……………。
- (6) わが身に光をそへるには……………。
- (7) なんぎな人にたいしては……………。
- (8) 病は口から入るから……………。
- (9) たとひ身分は低くとも心は……………。
- (10) 遠き祖先のをしへを守つて……………。

〔注意〕若し時間が足りないやうであつたら三は家庭課題とする。

修正尋常小學讀本教授細案卷六終

大正九年十二月二十日印刷

大正九年十二月二十五日發行

定價金貳圓

修正尋常小學讀本教授細案

第六卷



著者 友納友次郎
 著者 野澤正浩
 發行者 東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地 目黒甚七
 印刷者 東京市牛込區板町七番地 本間十三郎
 印刷所 東京市牛込區板町七番地 日清印刷株式會社

發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目
新潟縣長岡市表四ノ町(本店)

目黒書店

(東京) 電話京橋二一六三番
振替口座二八〇九番

(長岡) 電話長岡一八番
振替口座三六一九番

263
104

104



263

104

終

